
Mr.big

堀 ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mr. big

【Nコード】

N0951Y

【作者名】

堀 ゆう

【あらすじ】

奇妙な館が建つ孤島・ワルハラという天上界には一人の女が眠っていた。彼女は再び訪れるだろう『時』を待ち続けている。そして、ある青年が誘われて買った宝くじが当選してしまった事により、その止まっていた時間が動き出してしまう。やがて、出会う女と青年。この二人の奇妙な物語と、それと同じくして始まったもう一つの物語が交錯する時、果たして何が起きのか!?

プロローグ

今日は我が人生で最良の日になった。

「…いや。まて、マジあり得ないだろう」

新聞を床に広げながら、三枚の紙切れから目を離せなかった。

何度も確認した。もう、これでもかって位に確認に確認を重ねた。それでも、紙切れに記載された数字の列と新聞の一項目に出されている数字の列が一致する。

宝くじ。

会社の先輩から誘われたのが事の発端である。

先月の給料日前の凄まじい金欠状態の時の事だ。あと給料日まで一週間もあるというのに財布には野口さんが一人。

“だからこそ買うのだろう？”

一等三億、二等で一億。そんな広告を見て誘われたのだ。

当初はそんな余裕もないし、そもそも宝くじなんてモノには興味を持たずともなかった。しかし、誘われた時の言葉に、無謀さというのだろうか。それに対して妙に惹かれてしまった。

とにかく、そう言われた時は自分も買いたいと思った。思ってしまった。だが、それがあれほどの苦行になるとはその時は考えていなかった。

正直に言おう。

人間、水さえあれば一週間は持つ。いや、持たせて魅せます。冗談なく。

ある時は吐きそうなまでに水で腹を膨らまし、ある時は温めて飲んだみたり、またある時は凍らせて固形物として食べ、一週間を乗り切った。

そして、境地に至った。二度と先輩の口車には乗るな、と。

「でも、それは撤回しないとな。これからは先輩に足に向けて眠れない訳だし」

まあ、その先輩は、つい三日前に会社を辞めてどこにいるのか分からないが。

「しかし、五億かぁ。……こんな紙切れが野口さんを越えて、さらに福沢さんよりはるか上になるなんて」

そう。この紙切れ三枚とも当たっていたのだ。それも一等と二等が二枚のワンツーフィニッシュ。

「あれ？ この場合はワンツースリーフィニッシュか？ それともワンツーツーフィニッシュか？」

自分自身でも何を言っているのか意味不明である。

勢いよくソファーに腰掛ける。天井の明かりに紙切れを透かして見たが、そこいらにありそうな紙に印刷が施されているだけで別段、特別性は感じられない。

「どんな偉業を成し遂げて福沢さんより上になったんだ、この紙切れめ」

身に覚えのない幸福が転がり込んできた事にどうしようもなく動揺しているようだ。

かれこれ二時間。こんなやりとりを一人、部屋の中で行っている。そう、頭の中はまともな働きをしていない。

真性のアホ。ここに極まる。そして、馬鹿な頭なりに気づいてしまう。

「…もう、何もしなくても生活できるじゃん」

ダメ人間な発想に。

時刻は九時前。もう、会社に行ったところで遅刻は確定である。というか二時間以上もここで不思議な踊りをして自身が混乱していたようだ。

当選に気づいたのは今日の朝である。

いつも通り朝早くから起床し、新聞に目を通しながら煙草に火を着けた時だ。偶然、宝くじ当選の掲載に目が行った。

そういえば買っていたなあと、ふと思い出す。

なけなしの野口さんを手放してまで買ったというのにどうして忘れてしまったのだろうかと思えたが。それだけ、あのお水生活が過酷だったのだらうと納得する。

まあ、なにはともあれ、財布から三枚の紙切れを取り出し、そして、今に至るのだ。

ということで、重役出勤の如く会社に出勤。

「早いですが、これからは実家で余生を送ろうと思ひまして」

たったそれだけを上司に告げる。

「…すまん。聞き取れなかった。もう一度言ってくれないか？」

普段から威厳の塊のように振る舞っている人間の呆けた顔を見るの

は、いや、なんていうかマジで癖になりそうだ。

「もう十分働いたんで、これからは老後を楽しもうかと」

「…小野鎖^{おの さす}。お前はまだ二十歳^{はたち}だろ？」

ごもつとも。しかし、俺にはもう働く意味も価値もない。

その後、納得はして貰えた。理解はしていないようだが。

「まったく。池内^{いけない}に続いてお前まで辞めるとはな。…ああ、小野鎖、お前は一度、病院で見てもらった方がいいぞ。なんなら良いところを紹介する」

全力でお断りします。

傍から見れば普通の考えではないが、今の俺に限っては至極まっとうな判断だと思う。

一カ月は最後の筋を通すという意味合いから普通に出勤した。その後、誰からも惜しまれる事なく、偏見の視線を浴びながら退職。

その次の日。

意気揚々と紙切れを大金に変えようと自宅を出た。

が、その時に気付くべきだった。あまりにも上手くいき過ぎている、と。



交差点。青信号。

当たり前のように渡る。同じように大勢の人々が隊列を組むように渡る。

中間点。ちょうど道路のど真ん中で立ち止まる。

どうも、視界が霞んで見える。目を擦りながら、疲れているのかなあ、思った。

もう一度、目を開けてみると、さっきまでの歪んで見えたものは正常に映っていた。軽い立ち眩みのようなものだろうと考えたが、ふ

と、胸に違和感を覚えた。

その違和感を確かめるためだったのか、無意識に胸に手を当てていた。服越しから触った感触は特に変わったところはないが、服がじつとりと湿っている。俺はとんでもなく汗を掻いていた。

異常だ。これは間違いなく、体調がおかしいと気づいたと同時に体を動かす事が出来なくなった。

———心臓発作。

頭によぎったのはそんな単語。

頭では理解できなかった。でも、体は正直で、頭より体が理解してしまった。

全身から生ぬるい汗が噴き出す。体中の穴という穴から溢れ出ているのがわかる。

呼吸がおかしい。体は酸素を欲しているのに、その体がいふことをきかない。

心臓から離れた部位から力が抜けていくのがわかる。

自身が見ている世界から色が抜けていくのが分かる。

必死に繋ぎ止めている意識を手放そうとしているのが分かる。

そして、暗転。視界に入るのは横になった世界と右手に握りしめられている紙切れ。

ヒューヒュー、と掠れた呼吸音がとても耳障りで悪態をつきたいところだが、それは出来なかった。もう、そんな力はどこにもない。もう、助けを呼ぶこともできない。

まともに動かせるのは眼球だけ。でも、だんだんと目を開けていることが辛くなっている。

宝くじに当たったのになあ、と誰かに告げることも出来ず、そうして、崩れていく世界の風景の中、最後に見たのは宝くじを買うキツカケを与えた人物だった。



夜の海。静寂の時間。

単調な波の音だけが、月の明かりだけが照らす世界に響いては消える。

そんな暗闇の世界の奥。一つだけある孤島の館。その館の一室の天井のベッドには一人の女性。

規則正しい寢息の下、彼女は眠っている。

何日も何週間も何カ月もの間。もう、どれだけ眠っているのだろう。

この島に居を構えた当初、彼女には毎日のように『訪問者』が訪れていた。

彼女はその訪問者を応対し、戯れる毎日を過ごし、それは『賑やか』な日々だった。

彼女もそんな日々を鬱陶しく感じはしていたが、それはそれで納得

できる日々を淡々と過ごしていました。

いつまでも続くと思っていた。それだけ彼女は周囲から注目を浴びていたのだ。少なからず、彼女もそれは感じていた。

けれど、未来永劫なんてものは存在しない。

どんなに栄え、繁栄したところで、その先に待っているのは無。

彼女のそんな日々も終わりがあある。

最初は一日置き、次に一週間置き、そして一年置き、ついには訪れる人の足は途絶えた。天幕が下ろされるように彼女の舞台は終わりを告げる。

そして、その時から彼女は明確な形を持って一つの方向へと収束していった。

「……侵入者、か」

ポツリ、と呟く声は小さくすぐに暗闇の中に消えていく。

どれだけの月日経ったのだろう。

深い眠りの中にいた彼女にとっては光のような一瞬でもあり、酷く長い時のようでもあった。

未だ、覚醒しきっていない思考の中で月の日を見る。

長い眠りから覚めた彼女にとって今見える月はどのように見えているのだろうか。

変わり映えないだろうか。

変わり果ててしまっているのだろうか。

満月の空の下、三日月に笑う。

「私を眠りから覚ます以上、時がきたというコトかのう」

スツと、細める目は怪しくも艶^{なまめ}しい。

彼女からは領域テリトリーを荒らされたことも眠りを妨げられた負の感情は見えない。

あるのは、可憐に花開く表情だけ。

「いや、久方ぶりの来客だ。手厚く歓迎してやらねばな」

窓を開け、トンツと重さを感じさせない跳躍して夜に飛び込んでいく。

「さあ、開幕の時だ」



俺は昔から引きが強かった方だと思う。

といっても、アイスを買って当りを引いたり、班決めのクジで仲の良い友達と一緒になれたり、うん、地味な引きだ。だから、あの宝くじは一生分の引きを、運をすべて使い果たして当選したのだろう。

そして、運を使い果たしたのが、まさに運の尽き。

「しかしだな。その大金を使うおろか、換金さえしないで死ぬなんて、どんだけアホらしい死に方なんだよ」

結果は、まあ、覚えている記憶から考えて駄目だろう。それに決定的な証拠が目の前に広がっている事だし。

岩場の波打ち際に腰掛けている。白い呼気が身を包みながら、独り、どこまでも続く巨大な闇と対峙していた。

「ここはヘルorヘブン？」

あまりにも目の前に広がる世界が見たこともない場所だったおかげで自分が死んだのだと気づけたが、自分の考えていた死後の世界とは少し違って、なによりこうして自己の意識がしっかりしていることに違和感を覚えた。

そして、考え付いたのが宗教的な考え。天国と地獄だ。

ここがヘル方面ならば身に覚えがあり過ぎて、これ以上考えたくなかった。臭いものには蓋を。しかし、ヘブンだとしてもこっちはこっちで身に覚えがなさ過ぎて無理がある。

「……やっぱ地獄かなあ」

というか、改めて考えてみれば、やっぱり死んでるね俺、などと実感した余韻に浸る。

———暇なのだ。

死んでしまったものは仕方がない。人間、諦めが肝心。なワケで遠くで何やら騒がしい音がするのでそちらに行ってみる。

そして、問いたい。あらゆる生命を生み出した神様は己を天国と地獄、どちらに落としたのかを。

一段と風が強くなる。

その風の中に自身が未だに体験したことのない鋭さが混ざっている事に思わず身を震わせる。

ゆっくりと、向かい風に歩き出す。



「古い時代からの議論になりそうではあるが」

俺は一人、呟く。

目の前には四人の男と一人の女。

「俺にとって死後の世界とは、あくまでも虚無なんだ。まあ、宗教的に考えれば天国と地獄で、あるいは天使と悪魔の、空想的な世界。俺にとってはそれ以上でも以下でもない」

周囲は穏やかな波のさざめく海岸。

「だから、こんなところに来てまで争いが起きるとか論外なんだよね。やるなら下の世界でやってもらいたいワケで……。あれ？ここが地獄なら上か？——いや、どっちでもいいか。つまり、俺の居ない所でやってほしい。悪魔にそそのかれただの、天使からの聖なる使命だの、その辺りは願い下げだ。死後の世界にふさわしいのは、普通とか言われようが何だろうがやっぱり、空っぽの世界。夢がないで大いに結構。俺は、ようは楽が出来ればいいんだよ」

岩陰から見る、その先の光景から目が離せない。

音は単発だけ大きく、一定のリズムの下、より勢いを増して聞こえてくる。

四人の銃を持った男達が一人の女を囲み襲っている。女はその中央で相手を待ち構えながら、動かない。

四人の男達は全身黒づくめ。しかし、それぞれ体型が異なり、役割も決められているようだ。

一人が牽制を行い、一人が隙を突き、もう一人が必殺を試みる、そして最後がそれらのバックアップへ回る。

必殺のパターン。洗練されたコンビネーション。

常人相手ならば、その一人一人が放つ攻撃が必殺を意味する圧倒的な銃弾の嵐。

そしてなによりも常識では考えられない速い動きの中で行われる連携。

卓越した技術と研鑽の果てに培われた阿吽の呼吸。そして、それらの基盤にある人の領域を超えた身体能力。

「――――」

先ほどのようにしゃべることが出来ない。目の前から発せられるモノが何か明確に理解し始めていた。

疾駆する黒いナニか。

何か、よく分からないモノたちの争いを見ている。

理解できないモノたちを見ている。

あまりにも現実感のない動きに、脳が正常に働かない。

「――――あ」

ただ凶器の弾ける音だけが、あの集団は殺し合っているのだと、否定なしに知らせてくる。

それも人間同士ではなく、人間の皮を被った別の何かだ。

あんなの、誰が見たって人じゃないってわかるだろう。

第一に人間はあんな風に動ける生物ではない。

「――――」

…死ぬ。

一度、死んだ自分でも、ここに居ては確実に死ぬと分かる。

アレには関わってはいけないんだと理解できる。

早く、ここから離れなければ俺は死ぬ。

鼓動が激しいのはそういう事だ。

「っ――――」

これ以上直視してはダメだ。

だというのに体はピクリとも動かず、呼吸が荒く苦しい。

逃げたいと思う心と、それを行った時に見つかるといふ判断。

どっちが正しいのかはわからない。

しかし、そんなコト関係なしにその光景から目が離せなかった。

パキッ。

気付いた時にはもう遅かった。

緊張のあまり力が入り過ぎていたようだ。

手をかけていた岩の端が欠けてしまった。

先ほどまで、流れるように動いていた男たちは静止し、此方をうかがっている。

抑えようもなく動悸が激しくなる。収まらない衝動が自分の内から湧き出では溢れるように汗となる。

理解が出来ない。

止まらない。震える体が。

止まらない。生温い汗が。

止まらない。自身の異常な感情が。

なんで、俺が？

服の胸倉を掴み、体を縮ませる。

瞬間、先ほどまで数十メートルはあった距離を瞬く間にゼロにして目の前に立つ一人の男。

自身よりもはるかに大きく、鍛え上げられた肉体。自身など簡単に殺せれるような太い右腕が此方に伸びる。

「……………ひっ……………！」

殺される。

そう感じた瞬間の行動は反射的なモノだった。

いきなりの事に防衛本能に従った俺は、あろうことか、その男の顔めがけて拳を突き出していた。

——殴ろうとした。

「……ハア、……ハア、……ハア、」

こぶしは男の鼻、その寸前で止まっていた。

とっさに自身が何をやっているのか気付き止まってくれたのか、辛うじて相手には当たらなかった。

…何やってんだよ俺は。

いくら相手が得体のしれない人物だとしても、しょっぱな殴りかかるのはどうかと思う。もしかしたら、話せば何とかなる相手かもしれないというのに。

ともかく、このこぶしを下ろそう。話すにしたってこのままでは不味い。

一つ、深呼吸。

緊張からきた体中の硬直をほぐしながら腕を下ろそうとして、

「動くな」

いつの間にか背後で銃を構える男に制止された。

「っ、……………」

ようやくほぐれてきた体がまたもや固まる。

「お前、何者だ」

明確な敵意の下、背後の男は自身を問いただす。

俺は関係ない。ただ、見ていただけ。急に目の前に立たれて驚いて

やってしまった。わざとじゃない。

頭の中には言い訳の言葉が湧き出てくる。

「小僧、答えろっ！」

何も答えない相手に更なる苛立ちを露わにする。

早く答えてしまえばいいものを。そうすれば少なくとも敵ではないと弁明できる。

しかし、それは叶わない。

俺はあてられて（・・・・・・）、まともに動かせる部位がないのだ。

自分の体だというのに他人によってその自由を奪われるなんて、笑える。

と、縛るように纏わりついた圧力が別の何かによって遮られる。

「やめよ。それほどの殺気を浴びては普通の人間が喋れるはずがな

かろうに」

この場にはあまり似合わない軽やかな声が響く。

暗闇の中、声のする方向へ視線を向ける。

「まったく。あれだけの戦い方が出来るというのに一般人の区別は出来ないとは、なんとも笑えるではないか」

女は笑っていた。正直、何が笑えるのか理解できない。

けれど、女にとっては至極笑えることのようにだ。

真っ白のワンピースのような、ドレスのような服を着ている。足は素足でそこからはスラッとした足が伺える。背中まで伸びた髪。白髪の少女、いや、女性という方が正しいか。

その女はこちらに近づく。

それにつられ、雲に隠れていた月光が辺りを照らす。

「…ふむ。おぬし、今にも死にそうな顔をしているぞ。大丈夫か？」

暗がりのせいでハッキリと見えなかった女の顔が見えた瞬間、目を奪われる。

いつの間にか、さっきまでの圧迫感から解放されていた。

しかし、今度はそれよりも圧倒的なモノに釘付けになってしまっていた。

「よい。ならば、おぬしはここで観客として我の舞台を魅入っておるがよい。ちょうど、役者しかおらぬ劇に物足りなさを感じていたところだ」

いや、もうすでに彼女から目が離せなくなっている。

俺は一度、死んで自分はおかしくなったのかもしれない。美しいモノは醜く、醜いモノが美しく。今までの常識とは逸脱してしまっているのかもしれない。

けれど、ここが本当に地の底ですべてが醜いモノなんだとしても、彼女の美しさだけは確かなものなんだと確信できる。

だから、この世界が何だろうと構わない。

「では、再演といこうか？」

それだけ俺は彼女に参ってしまっている。

『では、再演といこうか？』

彼女はそう言い、男たちを見据える。

「ふ、ふざけたこと言うなっ！コイツはお前の仲間で、陰から我々を狙っていたんだろ！？そんなヤツを野放しのままにして戦闘ができるかっ！」

背後の男は怒鳴り散らす。

突きつけられた銃口が後頭部にぶつかる。

「銃を下ろせ。アガサ」

「しかし、こいつは攻撃を仕掛けてきたのですよ！」

「…本当に敵だったとするならば、このまま私をなっているだろう。しかし、彼は寸前のところで止めた。とっさの手が出してしまったの

だろうよ」

自身が殴りかけた男が背後の男に話しかける。

「少年。君は敵ではない、それで間違いないな？」

なんとか縦に首を振る。

「…そうか。では、安全な所へ逃げたおけ。戦闘が始まれば君の事は気にしていられなくなるからな」

そっと、硬直していた腕を掴み下ろしてくれる。

…器の大きい人で助かった。無意識とはいえ、仮にも襲い掛かったのだ。この場合、殺されておかしくないんだ。

解放された安堵感からか、一気に脱力。と、それと同時に膝が震えた。だした。

「……あ、れ？」

それに気づいた瞬間、体中から力が抜けて尻餅をついてしまった。すぐさま立ち上がろうとしたが、腰も砕けたように力が入らなかった。

「情けない」

背後の男はそう言い捨てて、彼女の方へ向かう。それに続き、他の男たちも彼女が待つ場所へ向かっていく。

死ぬかもしれないというのに、彼らにはそんな迷いはなく、淀みない足取りで死地へと向かう。

それを呆然と見ていることしかできなかった。

音は未だ、止まっている。

「みな揃ったようだのう。∴それで、貴様らはこのまま続けるのか？ 性急な事はあまり喜べたことではないが、焦らし過ぎるのも褒められたことではないぞ？」

未だ、時は止まっている。

「我を殺しに来たのだろうか？何を出し惜しみしている。……確かに貴様らは腕がいい。そこいらの者とはわけが違う。こうして、ほんの少しではあるが戯れ、どんな日々を過ごし、この舞台に立っているのか理解できる。このまま続けていたいと、少なからず我も思う」

雲から顔を出していた月は、何かに怯えるようにまた隠れてしまう。

「……しかし。その程度ではなからう。まさか、本気でその程度で我が殺せるとでも思っておるのか？——安心せよ。それ（・（・）は（・）我は（・）殺せん（・・・）よ（・）」

瞬間、音は死んだ。

膨れだす殺気。

「——せっかちな御仁だな。舞台なら少しずつ場を盛り上げていくのが定石だセオリというのに」

「なに。たまにはサプライズも必要だ。そうでなければ観客が飽きてしまい、退屈してしまう。それでは失礼であろう？」

ふと、こちらに視線が集まる。

「――――」

いまだに尻餅をついたままの俺。

本当なら、もっと離れた場所に逃げたかったのだが、

「こんな時になって足に力が入らないなんて……」

情けない話、腰を抜かしてしまって身動きが取れなかった。

「……確かに、これ以上時間をかけたところで行きつく先は同じのようだ」

溢れ出していた殺気は、急速に収縮していく。

「―――では、期待に応えましょう」

横に並んでいた陣形から一箇所に集まりだす黒づくめの集団。

先ほど感じていた溢れ出すような殺気はない。

今あるのは、濃縮された殺気。

前のが散弾ならば、今のは貫通を目的にしたような弾丸（殺気）。

「なっ——」

ふざけているとしか思えない。

そんなモノを人間に対して向けていいものではない。：いや、むしろそんなモノを発せるコト自体が間違っている。

「よい。では——疾く奔るがいい下郎。その身が全てを以て、我が身に届かせてみよ」

悠然に、片手を中空にかざす白髪の女。

——止めないと。

アレがどのようなモノなのだとしても、食らってしまえばただでは済まない。

…いや、結果はどうあれ、どちらも無事ではない。

「やめっ————！」

しかし、もう遅かった。

爆発したように四人の男たちは彼女に向かって爆ぜた。

一斉に飛び出した中で一番前に飛び出した一人の男。

「ハッ————！」

両手に持った二本の曲剣。左右へ思いっきり投げた剣は回転しながら女へと飛来する。

それを見て、前へと歩き出す女。

後、一秒とかからずに相対する黒と白。互いに無手。

明らかに前までとは違う戦法を使う黒づくめの男たち。

常に一定の距離を保ちながら外からの攻撃。より安全で確実な戦法、だというのに、いま行っているのは相手との距離を縮め、肉弾戦を行おうという動き。

…ありえない。自ら安全圏を縮め、それでもまだ、その距離を縮めようと前に出る。

あきらかに無謀な行動。ましてや、男は武器を手にしていない。これは自殺行為に等しい。

…だというのに男の目には迷いはない。

それだけの策がある、というより死を恐れていない、という方が正しい。そう感じさせる目だ。

「――行け！」

そう告げて、両手を交差させる男。その合図に反応し左右に投げていた曲剣が急激に速さを増して彼女へ向かう。

左右からの同時攻撃。タイミングからして避けるコトが難しい。更には避けれたとしても正面から男が迫りくる。左右からの攻撃と正面からの襲撃。二段構えの攻撃。回避は不可能だ。

「――ふむ」

しかし、そんな不可能を可能とするように彼女はクルリと舞うように回る。

と、同時に鉄と鉄が交じり合う音がすると、彼女に迫っていた曲剣は地に落ちた。

何をしたのか、理解は出来ない。

「――チツ」

それを見て男は更なる加速の下、彼女へ迫る。両手には先ほど地面に落ちた曲剣と同じ型の剣を持ち、そのまま振りかぶって女に襲い掛かる。

「ハアーーーーッ！」

女の背後を狙う男。女はさっきの舞から正面を向いていない。

絶好の機会であるソレを見逃すはずもなく、男はそのまま両手を振り切り、

「…四十点。奇襲は慣れてしまっていてな。正面からより背後からの対処の方が、我は得意だ」

くるくる、と弧を描く男の両腕。細く赤いラインが宙を舞う。

彼女は、スッと上空へ手を挙げる。

吸い込まれるように鍛え上げられた男の両腕は、か細い女の腕に掴み取られた。

と、呆然としていた両腕を失った男が、ふと笑うと体から剥き出しの刃が女に向かって伸びた。

体に仕込んでいたのだろうか。両腕を失った男の体から刃が突き出てきたのだ。

迫りくる刃は女の顔を目掛けて伸び続けた。

が、すっと出された女の指に挟まれ、眼前で止まる。

「・・・五十三点。他者の命を犠牲にしてまでの攻撃は見事ではあるが、ほんの少しでも迷いを持つな。でなければ犠牲になった者が浮かばれぬであろうに」

両腕がない男の背後にはもう一人の男が直剣を突き立てながら驚愕の眼で女を見ている。線のような速さで襲いかかってきた刃をたった二本の指で止めてしまったのだ。

衝撃的だろう。

回避不可能と思われた左右からの双撃。決定的な隙をついた剣撃。そして、命を犠牲にして放たれた刺突。

この三段構えの攻撃を軽々も跳ね除けたのだ。

もう、信じられない光景でしかない。

……しかし。

「――馬鹿め」

彼らにとっては信じられない光景ではあっても予想しえない光景ではなかった。

「両手が塞がっていては受けきれないだろうが」

再度、背後からの奇襲。それも相手は両腕が塞がっている状況。

いくら背後からの対処が上手かろうとも動かす手が塞がっていてはどうにもならない。

「死ねっ！」

手にはナイフ。狙うは心の臓。

幾度となく行ってきた動作の下、男は肋骨の隙間から心臓まで届くポイントにナイフを突き出す。

とっさに背後へ向こうと女は体を捻ろうとしたが、正面の刃を突き立てていた男が短刀を振りかざして襲いかかってきているのに気づ

く。

女は半ば反射的に正面の男を優先してしまった。

女の振るった“爪”によって切り刻まれる。それでも致命傷の傷を負った男は必死に女の足を掴み身動きできなくする。

女は動かない。いや、動いたところで自身を止める術などない。

そう確信した男は、

“———とった”

二人の命を犠牲にしてできた、このチャンスを信じて疑わなかった。

「六十点。その潔いまでの命に向けた鋭さ。なかなかのモノだが、それでは我には届かぬ」

男のナイフを握る手には女の足下から伸びた白い毛の生えた長いモノによって拘束されていた。

「ぐっ！」

「しかし、長い眠りから覚めたというのに……。何も変わらんのかな、人間というサルは」

彼女の嘆きが響き、その尻尾のような白い何かは男の首を絞めようと動く。

だが。

「いや、人は変わったよ。……そしてアガサ、お前の、お前たちの行動は私にとっては百点に値する」

乾いた銃声の音が一つ、辺りに鳴り響く。

不吉な予感が一気に膨らむ。

三人の男と白髪の女。

その場から離れた場所に一人の男が黒い銃口を彼女に向けていた。

銃口からは湯気のような煙。

「この三年間、貴女を殺すために様々な情報を集めた。…そして、その情報道理に貴女の攻撃手段は三つしかなかった。ゆえに、その手段を塞ぎ、身動きを取らせなくさせてもらった」

二人の命を使ってな、と嘲笑うかのような笑みを零す。

目で追えない一連の動き。次々散っていく命。自分の常識を超えてしまった現実が頭を混乱させている。

しかし、そんな中で仲間を犠牲にした男の言葉がどうしても頭に来た。

———人の命を使うなんて

無意識に手には力が入っていた。

「って———!？」

小石程度の岩の欠片が手のひらにあった。

「……これは、さっき欠けた岩……」

気づかないでずっと握っていたようだ。

…よくこんな固い岩を欠けさせることができたものだ。よく見てみれば、岩というより鉄に近い。いくら端っこの部分とはいえ、そういう力がなければ無理だ。

「……知らないうちにかなりの力を入れてたのか？」

しかし、これは幸いだろう。

煮えたぎっていた頭が痛みで冷めた。

これなら、この場から離れることができる。もし、あのまま正常に働かない頭のままだったら、俺は何を仕出かしていたかわからない。ゆえに早くこの場から逃げたいと頭では思っていた。

——けれど。

「……このまま離れるワケにはいかない」

そう。まだ、幕は落ちていない。

だって、彼女は――

「――そうか。変わってしまったのか」

まだ、舞台に（・）立って（・・・）いるん（・・・）だ（・）。

ぱしゃん、と飛沫しぶきをあげる真っ赤なライン。

赤い飛沫しぶきは濃い暗闇に染み込み、より濃い漆黒へと変わる。

逃げるように後ろへと引いた男は、色めきだった眼で彼女を凝視している。

「くっ。――解せぬ。なぜ、貴様は立っているっ？ 避けようも防ぐことも出来ず、確実に当たったはず！……それなのに何故、お前は私の目の前にいる――！！！！」

肩を押さえ、男は目の前に見える現実がおかしいという。

仕留めたと確信していた男にとって、驚愕でしかないだろう。

しかし、これは現実。彼女は傷一つなく、男の目の前に立っている。

「なに、簡単な話。確かに人も時代も変わったのだろう。戦い方も武装も。我を殺そうとした右手の武器、それにしだって我から見ても時代の変化を感じてしまうよ」

男は肩口から腰まで斜めに切られている。それはかなり深く、肩のあたりは辛うじてくっ付いている状況だ。

それでも、男は膝をつこうとしない。最後の意地なのか、それとも勝利への執念によるものか。

ただ、どちらにしても男の目はまだ死んでいなかった。

「そうだ！古い文献を片っ端から読み、貴様の情報をかき集め、考える状況を予測し、そのうえで最高のメンバーを揃えてきたのだ！情報も戦略も“過去”とは違い、完璧だったはずだ！……なのに、なぜお前は倒れないっ！……！」

女はそつと目を閉じ、溜め息を吐く。

「…そう。同じことを繰り返すようでは新しい時代とは呼べない。でも、最初の時点で過去と同じ過ちをしているのだよ、貴様の言う完璧とかいう計画は」

目を見開き、女を直視する目は、あまりにも驚愕の色で染まっていた。

「貴様は私の事は調べたようだが、私の父の事は調べなかったようだな」

「———あ」

「ふむ？ 思い当たる、というコトは少なからず調べていたようだろう。———その通り。我もな、“欺く”ことは得意なのだろう」

平坦だった口元が吊り上る。

男は細部に至るまで綿密に組み立て、完璧な計画を立てた。

彼は、己の立てた計画に不安要素はあっても失敗することなど少し

も考えていなかった。万全な、と形容していいほどだと自負していた。

しかし、ある意味でそれは非常に杜撰ずさんなものであった。

どうあがいてみたところで、しよせん人は人、神にはなれない。

神たらんと欲するのはたやすいが、人が人である限り、いかなる人物でもどこかに綻びが生じる。

では、神ならぬ者に、いったい未来の現実を、それぞれ構成する人間の心理を、行動を、あるいは今の現実を、完全に計算し、予想し尽くすことが出来ようか。

女は悪戯が成功した子供のように笑う。

それは本当に無邪気で、艶めかしいほどの色を感じさせる。

笑いが世界を覆う。

笑う女。崩れる男。

幸福と絶望を味わう二者。

弱肉強食を絵に描いたような光景が、いま目の前にはあるのだ。

そして、女の笑いが終わる頃には幕が落ちようとしていた。

「――では、そろそろ幕ということにしようか」

男は項垂れたまま、思いつめるように目を閉じている。

「日本には辞世の句とかいうモノがあるらしいが、その日本人らしく何かあるか？」

ふと、こちらに視線を送る男。

意味もなく、それにビクリと反応してしまう。

だが、瞬く間に男の視線は一人だけ生き残った男へ向けられてしまう。

…少し、怯えた自分が馬鹿みたいに思えたが。それよりも何か申し訳なさそうに此方を見た男の視線が気になった。

そして、男は何やら、服の中から一つの黒い箱を取り出す。

——すると、瞬間。

目の前には膝をついた男が現れた。

「———すまない」

ただそれだけを言い、俺の胸めがけて腕を伸ばす。

男の腕前が良かったのか、さほど血は出ずに俺の心臓は引き抜かれた。

「———ごふっ」

せり上がってくる血の味。一度だけの吐血。それ以上は出ることはなく、男の腕前は本物だったのだと証明された。

今回は苦しみや痛みはない。

あるとするなら、少しの息苦しさと眠気。

けれど、それも気にはならなかった。だって、それはもうすぐなくなる。楽になる。

つい最近味わった。

慣れたくはないが、この感覚はそういうモノなのだと、心より先に体が理解してしまった。

……それをもう一度？ 本当に？

男は俺の体から奪った心臓を箱に入れる。すると、俺の心臓によって躍動するかのように黒い箱が脈打つを見た。

俺の心臓によって生を宿したようで、なんだか気持ち悪い。

「アガサ、お前は逃げろ。そして、今見た事を皆に伝えろ」

「し、しかし、それでは！」

「これは、私の失態だ。ならば私がせねばならん」

脈打つ黒い箱を何か光を帯び始める。

「時間がない。早く行け、アガサ。我々の死を無駄にしたのか！」

騒がしい周りの状況に反して、俺の頭にあつたのは死後の世界で死んだらどうなるのだろう、という疑問となんでこんな目に遭わなくてはいけないか、という気持ちだった。

正直、自分以外の事は些末事にしか思えない。自分が死にそうな状況で周りを気にしていられるほどの余裕はない。

「————少年。運が悪かったと思ってくれ」

————何をいまさら。

自分の運の悪さなど、とっくに理解している。だから、謝られても困る。

そう、言っ てやりた かったが どうやら 限界だ っ たらしく、 そのま ま 瞼 が閉 じてし ま った。

そして、 時間 の概念 がど のようにな っ ているの か分 からないが、 自 身 の感 覚で いえ ば、 今日二 回 目の 死 を迎 えた。

———夢を見た。

どこかへ出かけているのだろう。

パラパラ漫画のように移り変わる風景を見ながら、車の助手席に乗っている自分。

当たり前のように親しい人が周りにいることを感受していた頃。

ごく当たり前で何一つ幸福な要素がない光景である。

……どれだけ走り続けたのだろう。

気づけば、窓越しから見える風景は一変していた。

子供特有の初めて見るモノに対しての好奇心からか、興奮のあまり外に見える景色から目が離せなくなっていた。

外は、本当に水中の中にいるような――。

テレビや本でしか見たことがない水族館のようだった。

いや、事実ほんとうに水の中だった。

しばらくは、外を見続けていた。

――それは、長くは続かない。

しばらくして、下半身から冷たさを感じる。

あれほど暖かい車内が、冷たい水によって満たされていく。

……その中で、その冷たさを感じているのが自分だけ、というのは不思議な気分だった。

水の冷たさなのか――――周りに浮かぶ人を見てなのか。体は震えている。

この車内で、生きているのは自分だけ。

どうやら、事故にあったらしい。

よほど運がよかったのか、運のよく座っている場所がよかったのか判らないが、とにかく、自分だけが生きていた。

———生きていたい、思った。

いつまでもココにいては自分も危ないからと、ドアに手をかけた。

まわりの人たちのように冷たい水に沈んでいくのがイヤだった。

その強い気持ちで、心はくくられていたからだろう。

しかし、希望なんてモノはない。

ここまで運よく生きていた事が不思議だったのだ。もう、これ以上の奇跡は起こらない。

そう、助からない。

どんなに頑張ったところで、このドアも窓も開かない。

子供の力でどうにかできる状況ではないと。幼いながら、そう理解できる絶対的な現実だった。

そうして沈んだ。

息が続かなかったのか、諦めてしまったのか。

ともかく水の中に沈み、人がクラゲのように漂う水中を見つめていた。

結局、ドアは開かず窓も破る事は出来なかった。

自分の力では何もできなかった。

……もういい。目を閉じてしまえば、こんな現実を見なくて済む。

最後に、深く息をはく。

———これは、古い記憶だ。

そうして、俺は助けられた。

目が覚めると周りは箱の機械や色んなチューブが散乱した真っ白な部屋だった。

光を感じるのはいつぶりのだろうか。部屋は薄暗いのだろう。それでも、目蓋を開けるのが辛かった。

ぼんやりと辺りを観察する。

横にはガラス張りの大きな窓が見えた。そこからは次々と白衣を着た人たちが左へ右へと行き来しながら、時折こちらの様子を伺っている。

———そうか

“助かった”のだとわかった。

でも、喜びとかは感じなかった。無感動だ。死からの蘇生なんて興

味はなかった。

それよりも、窓越しから感じる視線が気になって仕方がない。檻の中の動物や水槽の魚の気分だ。

ふと、看護婦の目と交差する。何か良い事でもあったのか、口を手で覆い、大きく目を開いて此方を見ている。

突現、なにやら周りが慌ただしくなる。

首から聴診器をぶら下げた医師が落ち着いた風の口調で質問してくるが、その眼はさっきの看護婦と同じに見える。

どうやら、俺が助かったのはあり得ない事だったらしい。

やれ、生命の神秘だ。やれ、神の奇跡だ。

廊下を行く看護婦の話し声や足音が幾重にも繰り返される。自分のイメージしていた病院の陰湿な静けさに比べると、この慌ただしさは違和感を覚える。

目覚めたばかりの自分にとっては、まあ、お祭りみたいで鬱陶しく

思えたが、幸い、その賑やかさで無駄な思考に浸ることはなく、ある事実に至ることもなかった。

ほどなくして、病室は個室に移された。

箱の中に詰められてしまったように外からの音を遮断されている。

…居心地が悪い。

昼間だというのに部屋は静かだ。

ときおり廊下に響くスリッパの音だけが、外の様子を教えてくれる。

変な話。周りが静かになって、ようやく、ここが病院なのだと実感できた。自分のことなのにおかしく思う。

だって、目覚めてからの事を考えれば子供だって気づく筈だ。なのに、こうして静かな環境になって、ようやく実感できるなんて、事故の影響でどこかおかしくなったのではと疑いたくなる。いや、おかしくなったから、この箱に入れられたんだろうか。

…ああ、そう考えれば、この箱に入れられたのも納得できる。

俺は間違えて、あるいは奇跡的に生き延びてしまったのだ。

けれど、両親を亡くしてしまった小さな子供には、そんな奇跡はいらなかった。

だって、それはまるで俺が生き延びる代償に両親を犠牲にしたようではないか。



……音がした。

古く、しかし、たてつけが悪いワケじゃない扉が開く音がした。

その後に響く、絨毯の上を歩く鈍い足音。

「——っ」

窓を開く音とも暗かった部屋に光が差し込んでくる。

目蓋がまだ重い。経験上から後二時間は眠っていたい感覚である。

「いい加減起きよ。いくら寛大な我でも、そろそろ我慢ならんぞ」

近づいてくる足音と、涼しい外気を感じた。

「……ん。あ——、おはようございます」

「うむ。————ようやく起きたか」

目の前の女はクスクスと笑っている。

「……あー、そんな寝癖ヒドイ？それとも、寝顔が間抜け面だった？」

「ん？いや、そんな事はないぞ。……いや、むしろお主は寝相というより寝言の方が酷かった」

……それは、なんともお恥ずかしいことで。

……？

何かおかしい。いつも通りに起きたはずだが、何か変だ。

「そうかあ。……うわ、無意識の事とはいえ、めっちゃくちゃハズいし、女の子に聞かれるなんて。……あー、次があるならそんな事ないように頑張る」

寝起きの思考で返答する。

あまり頭が回らないせいか、先ほどの違和感が何なのか判らない。

「よい。頑張ってもらわぬ方が我としては楽しめるからのう」

何が楽しいのか、女は笑いが止まらなかった。

俺は目の前の女の子から目が離せなくなっている。

ふと、女の笑いが止まり、こちらの視線と交錯する。

……いけない。まだ寝ぼけていて、まともな思考が働かないようだ。

「あー、いま起きるから、ちょっと時間くれ」

と、いつものように近くにあるテーブルの上の煙草を手に取り、シユボツと心地よい音を立てて火を着ける。

「よし。目が覚めた。それで早速なんだけど————キミは誰？」

一服をしながら、徐々に霧が晴れていく中で、最初に疑問として頭に浮かんだのが目の前の人物。

上から下まで、白で統一された女の子に質問をぶつける。

「それは、まず、私の質問に答えてからじゃ」

ぴしゃりと、投げかけた質問を切り捨てられる。

見た目の年齢から考えても少女から大人の女性へ変わる、中間あたりの容姿である彼女は、なぜか爺言葉で話してくる。

「ふむ。順序に聞いた方がよさそうなの。…では最初に、――
お主は何者じゃ？」

「何者って、見たとおりだと思うよ。その辺にいる数多くの一般庶民の一人で……あ、車の免許証があるけど、見る？」

「？　メン、キヨ、シヨウ？」

ことん、と首を傾ける。

「そ、免許証。……えーと、財布はどこに……。あつ、あったあった。はい、これが俺の免許証」

財布から取り出した免許証を彼女へ渡す。まあ、これで怪しい人間ではないと証明できる。

――が。

「こんなモノに興味はない」

ろくに見もせず、手持ちにある唯一の身分証明は投げ捨てられる。

「興味がないからって投げ捨てんなっ!!」

「ん？ ああ、そうじゃな。部屋が汚れてしまうな」

投げ捨てた方へと拾いに向かう女。

「いや、違うって！それはゴミじゃねえし、むしろ、俺にとって貴重品だ！だから、さっき言った意味は捨てるなって意味で。……おい、やめろ。いや、冗談なく」

「なぜじゃ？ゴミは小さく、まとめて捨てるモノだろう？」

「ああ、それが本当にゴミだったらな。だけど、それはゴミじゃない。大切な物だ。だから、今すぐその手のひらにある物を返しなさい！」

なんとも渋々と渡す彼女の顔は、間違ったことはしていないといった感じでこちらを睨んでくる。

「まったく、こんな紙切れぐらいで騒ぐなど、お主は器量が小さいのではないかのう」

…器量が小さいのは認めるが、俺の免許証は紙切れではない。

若干、端の方が曲がっている免許証を奪い取り、すぐさま財布の中
にしまう。

溜め息が零れる。

これを見れば、何とかなると思った。少なくとも、自身の身元は
判ってくれると思っていた。

「つか、なんで見もせずに捨てようとするわけ？ 一応、これに
は名前とか住所とか、俺が何者か書いてあるのに……」

瞬間、鋭い視線と圧力が自身を襲った。

「我はお主に聞いているのじゃ。それをワケの分からん紙切れで説
明しようなどと、お主は我を侮辱しているつもりか？」

…気高い御方なんですな。

「別にそういうつもりじゃないけど……。それじゃ、俺が何者なのか、どう証明すればいいんだよ？」

「なに、証明などしなくてよい。ただ、お主が思った通り喋ればいい。その口で、声で」

「――――」

…驚いた、というよりは困ったという感じ。

彼女は俺自身の事を、俺自身が語る事をご所望らしい。なんとも、試されているようでいい気分ではない。

これで、もし嘘の内容を話したのなら、彼女は信じるのだろうか。

「それってつまり、俺を信じる、ということか？」

「有り体に言えば、そんなところじゃ」

信じる、というわけではなさそうだ。なんというか、嘘でもなんでも許容しよう、といった感じである。……明らかに器量はあちらの方が上だ。

すっと、女の手が頬にあたる。

「——ほれ、はよう名を名乗るなりなんなりせよ。女を待たせるような男は好かん」

さらりと言う。

その口調は気品があるくせに雅で、なんというか、耳にするだけで頭が白く——

「——っ」

……いや、なにを呆けているんだ俺は……！

「そ、そうだな。悪い」

熱くなっている頬を知られないように、とっさに後ずさる。けど、そんな俺の考えを知ってか知らずか。女は俺との距離を縮めてくるから思考なんてワケのわからん事になって——っ——っていつまでも黙っているのからこんな事になっているんだから早く名乗らないと。

「……俺はいちよう一葉。おの小野鎖一葉っていつて、ごく一般的な会社員、じゃなくて無職の人間だ」

——普通過ぎて自分でも情けない自己紹介である。

いやでも、この状況をどうにかしないといけなかったんだし。

我ながら混乱しているのは分かっているが、今の状況は非常にまずいのだ。

「——ふむ」

女は変わらず、やっぱりこちらから離れようとせず、混乱している俺を見つめている。

「……あー、違うか。やっぱりやり直そう。もっと詳しく話すとだな」

「いや、よい。お主の事はよく理解できた」

「は……?」

「しかし、何も偽らず本当の事を喋るとな。もし、偽っていれば殺してやったものを。…まあよい。そのように警戒する必要はもうないぞ」

「え……？」

やばい。彼女が俺の何を理解できたのか分からないが。ただ、わかった事は彼女は俺を試して、その上で殺そうとしていた事ぐらい。

「殺そうとしたって、俺、キミになにかやった覚えはないぞ」

「たんなる気まぐれじゃ。それ以外に他意はないから安心せよ」

……気まぐれで殺されかける状況で安心なんて出来ねえ。

悪戯っぽく笑いながら、こちらから離れていった女の後ろ姿が恐ろしく見えた。

「して、オモサス」

「違う。小野鎖だ」

「……むう。……オオサス。いや、これも違うな。……むむ」

ブツブツと、人の名字で呪詛を呟く。

外人には難しい発音ではあるかもしれんが、人の名字で呪いをかけようとするのでほしい。

「……ええい！ではイチヨウ！うむ、我としては、こちらの方が好ましい」

彼女にイチヨウと呼ばれた途端、顔から火が出るかと思った。

いや、初対面の相手なら名前じゃなくて名字で呼ばないかフツ……！？

「ちょっと待て、なんだってそっちの方で収まるんだよ！」

「我が呼びやすいように呼んだまでじゃ。何か不服か」

「——っ。……不満があるわけじゃないが、なんというか……」

「なら問題なからう」

「――――」

……なんか、とんでもない人物な気がする。

「では、質問の続きじゃ。これはそれ程重要ではないが、一応な」

そう言い、近くの椅子に座る。

「して、お主はあの夜の事をどこまで覚えておるのか？」

「それは――――」

覚えている。

煙草を吸った後、彼女とのやり取りの中で次々と思い出していた。

いうまでもないが自身の胸が貫かれたこともだ。

「…覚えている。けど、何で俺は生きてるんだ？死んでるだろフツ
ー……」

いくら彼女が規格外の存在であつたとしても、人を生き返す、なんて事は出来るとは思えない。そんな事をして彼女にメリットがあるとは思えないのだ。それに————私見ではあるが、彼女はそういった事よりも別の方が専門だと感じる。

「……記憶の方はしっかりしているようだのう。——それに関し
ては、お主は運が良かったとしか言えん。我としてはそれだけで済
むような事ではないのだが、事実その通りであるから仕方がない」

「運……？」

「そうじゃ。…ほれ、それが運よく助かった理由じゃ」

近くの黒く濁ったテーブルに置かれてある割れた小石サイズの欠片
を指さす。

…見覚えがある。

確か岩の物陰に隠れている時に力が入り過ぎて欠けてしまった岩の欠片——それは、その後も手に握りしめたままだったはず。割れてしまっているのは、どうしてかはわからないが、彼女はこの欠片が俺の命の恩人だという。

「でも、これってただの石じゃないのか？ どう見たって俺が助かった理由には思えない」

「重要じゃ。もし、それをお主が持っていなかったら、それこそお主は骨になって地の中だからのう」

「いや、骨って。…生物はそんな早く白骨化しないよ」

「我がそうしてやろうと思っておった」

「……………はい？」

彼女の話によると、死んでしまった俺の体が邪魔、……もとい哀れと思い、火葬したのち土に埋めてやろうとしたらしい。

しかし、俺の体に火をつけようとした時、生きていると気がつき、こうしてソファーに寝かせていたとの事で。

「…………あの後にも死にかけていたとは」

「うむ。気がついた我の洞察力に感謝するのじゃ」

「—————」

：確かに感謝すべきことなんだろうが、こう、素直に喜べない辺りが気になる。

——脱線してしまった。今はそれよりもなぜ生きているのか、それを聞くのが優先事項だ。

「…………なんだってこんな石に俺は助けられたんだ？」

「その石が火の炉と呼ばれているからじゃよ」

「火の炉…………？」

「そう、原初の火じゃ」

「原、初……？」

「もともとは神が初めて人へ贈った物なのじゃが、おかしな話で人が扱うには難しい代物でな。扱いを間違えれば、大きさによっては国一つは落とせるほどじゃ」

言っている事はしっかり聞き取れているくせに、意味が分からない。

「ちょ、ちょっと待て。……神とか国とか、いきなりそんな事を言われても————」

信じるはずがない、そう、言おうとして言葉にならなかった。

いくら頭では理解できない事であっても、心はそれが本当の事だと信じようとしている。

「信じられぬか？しかし、これは事実であって、その火でお主は生かされておるのじゃ。その内に宿った事によって」

「俺の体に？」

恐る恐る、自分の体だというのに得体のしれないモノを取り扱うよ

うに軀を触る。特に鍛えてもいない華奢な肉付きは骨の硬さしか感じない。しかし、躍動する、温かみのある鼓動を感じる。

「昔、どこぞの馬鹿がこの石を研究しておってな。身の丈の大きさを戦争を起こせるほどの力が内包しているのなら、小石程のそれを人の身に宿せばどうなるか、などと言っておった。ただ、成功はしなかったようじゃがな」

「…成功はしなかったって事は、やっぱり問題があったことか」

「そう、一度たりとも成功はしなかった。人間の、いや、生物の体の中には生きるためのモノが十分に備わっておる。その上で魂なんて目には見えぬ物質も入ってるのじゃ。それに小石程度とはいえ、膨大な力が投入されては人の身では耐えられまい。……まあ、例外はあるようじゃがな」

ふてぶてしく唇の端を吊り上げる。微笑を口許に含み彼女は嘲る。

「例外って……それは俺ってこと、だよな」

「然り、言うまでもない。憶測ではあるが、お主はあの男に心臓を引き抜かれ、体の一部を失い、隙間が出来てしまった。満たされていた器に火の炉を受け入れるだけの隙間が出来てしまったのじゃ。——つまり、お主に宿った火は失った心臓の代わりに躍動してい

る、というのが私の考えではあるが、不明な点もあるゆえに憶測の域は出ないがの」

「……………」

…これは、ただ助かったという話では済まない。確かに自身の胸からは鼓動を感じたが、それはおそらく本当の心臓ではない。彼女の話が本当であるならば、俺は心臓がない状態で生きているということになる。日本でもポピュラーなものにピノッキオの冒険なんて物語があるが、俺はある意味、その逆の状況に陥っているというのだ。人の心を持った人形ならぬ、人の心臓を失った人間。

正直、そんな状態で生きているコト自体おかしな話で、それを信じること余地も本来ならばないのだが、それを信じ得るだけの証拠が俺にはある。いや、残念なことに証拠があるのだ。

「…納得はしてないけど、理解は出来た。つまり、この石の中身が俺の心臓の代わりになってるって事だろ。でも、それって変じゃないか。石の中身がどんなモノか見たことないけど、燃料みたいなもんなんだろう？ そんなモノが心臓なんて形ある物になれるのか？」

いくら自身の常識が通用しないことを目の当たりにしてきたとはいえ、そういったコトにも条件ルールがあるはずだ。少なくとも形のもたないモノが形を持つには作用、手が（・）加えられなければ（……・……）ならないと思う。

「そこよ。我の言う不明な点とは。そもそも火の炉は純粋な力の根源のようなもの。ゆえに様々な方向性があって加工も出来るはずではあるのだ。しかし、純粋であるがゆえに手を加えたり、何かを混ぜてしまうとバランスが崩れる。脆いのじゃ。だから、使うのであれば、何も加工はせずにそのままの方向性で使うしかない。しかし、イチヨウはこうして生きて、火の炉の中身が消えている、となるとそれ以外には我は思いつかん」

「そのままの方向性？」

「察しの悪いのう。さっき言うたではないか、これは力の根源だ。とお主らでいえば争いの道具じゃ」

スツと立ち上がり、テーブルの上の割れた石――火の炉を手に取り、

「皮肉なものじゃ。神は良かれと思うてコレを贈ったというのに、それが争いの原因になるとは思わなかったろう。：いや、本来の目的はそこにあったのかもしれない」

くつくつと笑う。それに呼応するかのように風がざわめく。口元は手で覆い隠しているが、その在り方までは隠しきれていない。

「……じゃあ、俺が生きている事は本当の所わからないのか」

「そう。私が話したことはあくまで憶測。辻褄合わせの空想。それこそ、あの男が考えたような妄想でしかないのじゃが」

手を広げ、彼女は何か新しい生命の誕生を祝うかのように天を仰ぐ。白い印象を持つせいだろうか。彼女に白い羽が生えたように見えた。

「————喜べ、イチヨウ。おそらく、お主が初めての成功体じゃ」

————何も喜べない。

これは、体の中身が変わっただけの話ではない。あの夜までの自分とは違う、全くの別人に近い。人か人の皮を被った別の種へ新生したのだ。

恐怖を感じることはあっても、歓喜に震えることではない。目が覚めたら、自分が自分でなくなった喪失感。それはもう畏怖でしかないはずなのだ。

しかし、そんな考えが頭の中を駆け巡っているというのに自然と恐怖は感じない。ただ、こういう時どうすればいいのか分からなくな

っていた。

「自身に恐怖、しているわけではなさそうじゃな。…ふむ、順序が逆であったか」

なにか、蔑んだ目で此方を見る。

「————よい、続けるぞ」

ゾクリさせられる視線に、緊張気味に頷く。

「それでイチヨウ————お主はどうやって、どこからここに来た？ いや、何か目的があってここに来たのか？」

冷たい針が背中に刺さる痛みを感じる。

————威嚇だ。

風が部屋に入り込んで彼女の髪をなびかせ、顔の半分を隠す。目が一つ隠れたというのに視線の圧力は変わらない。

「————わからない」

どれだけ懸けたんだろう。たった一言口にするために随分精神をすり減らしていた。

しかも、こんな事しか言えないとは、自分の馬鹿さ加減には困ってしまう。彼女だって俺の頭の悪さに呆れている事だろう。

急速に軽くなる重力。

「∴お主は馬鹿とは思っていたが、頭の悪い馬鹿であつたか」

そら、みたことか。自分にだって簡単に分かることを他の人が気づかない筈がない。そもそも、こんなじゃなきゃ、もっと楽に生きている。

「しかし————いや、やはり好きでも嫌いでもない馬鹿じゃな」

何か考え込んだと思ったら、首を振り、どっちなのか分からない事を言われる。

つまり、どうでもいい、という訳だ。

「……悪い。今日起きた時と同じで気づいたら、あの海岸にいたそれ以上の事は何もわからない。……いや、ここに来る以前の事は覚えてるが」

「なんじゃ、覚えておるではないか。我が聞きたかったのはそれじゃよ、それ。まったく、何を聞いてたのじゃお主？」

理解能力あるのか？なんて言われて反射的に反論したかったが、気持ちを抑える。

言うことはどれも言い訳にしかない。己の醜態を晒すだけだと、そう思えた。

「……あー、もう。話す、話すよ。けど、聞いてから文句とか暴言とか、後その眼で俺を見るのは、その、やめてくれ。……なんだから死にたくなる」

「なんじゃ、馬鹿の上に軟弱なのか」

「違う。繊細なだけだ。……あー、うん。簡潔に話せば――」

途中、喋っていて恥ずかしくなったので、さっさと経緯を話した。

先輩に誘われて宝くじを買ってそれが当たった事。仕事を辞めて隠居しようとしていた事。換金しようと家を出て心臓発作を起こしてしまった事。

そう、自身のこれまでの経緯を話していると、ふと忘れていた事があったことに気づく。

あれは確か——いや、わからない。意識を失う前に一瞬見ただけでは映像が曖昧すぎる。

ただ、全くわからないという訳ではなく、見覚えがある顔だったと漠然ではあるがそう覚えている。それが誰なのか気づいた節があるのだ。

しかし、それにしても曖昧な記憶でしかない。単なる勘違い、思い違いと考えれば、それはそれで納得できる。第一に俺は二度死にかけたんだ。記憶の一つや二つおかしくなった所で何も不思議ではない。むしろ、その程度の欠損で済んだのは運が良いのだろう。

「……ん？二度死にかけた？」

疑問が浮かぶ。

今回の“二度目”の死は、あの石のおかげで生き延びることが出来た。けど、“一度目”の死は説明がつかない。いや、あの時の死そのものだった。俺は死んだんだ。

仮にあの後助けられたとして、目覚めたら夜の海が広がる場所にいたはずがない。つまるところ、ここは天国か地獄。死後の世界としか考えられないのだ。

しかし、そう考えれば新たな問題がある。

「…なあ。ここは、その、なんというか、どういう場所なんだ？」

俺の経緯を聞いてからずっと考え込んでいる彼女に問いかける。

「…ん？ ああ、ここは天上界——アースガルズとか呼ばれていた場所じゃ」

「——天上界」

「正確に言えば、その世界にあるワルハラという場所じゃ」

「ワル、ハラ……?」

「…本当に何も知らんのじゃなお主。よくそのような頭で生きてこられたものじゃ。——仕方がない、説明してやろう。ただ、我が説く以上、聞いても尚、わからぬとは言わせぬぞ、よいか?」

反射的に首を縦に振る。彼女の話し方は説明しているというより、調教、というほうが正しい。

「……さて、どう話したらよいものか。先ほど挙げたこの世界の名はな、お主らの歴史で言えば、とある民族の神話——北欧神話に出てくる世界の名じゃ」

北欧神話は、主に北ヨーロッパに住んでいた古代ゲルマン民族の神話である。ただし、彼らの住んでいた範囲は広大であり、北欧神話はゲルマン民族のすべてをカバーするものではない。現在、北欧と呼ばれているのはアイスランド、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドの五か国である。このうち、フィンランドのみは民族・言語ともに異なるため、除外するとして、残り四か国がいわば北欧神話の大まかな文化圏となる。

「しかしのう。この神話はこの民族の特質したものが反映しているせいか、重々しく暗い内容になっておって人間がやってきた事と大

して変わらぬ話になっておって、我は嫌いじゃ。……嫌いなんじやが、話の基本骨子はあまり変わりはせぬからな、そのまま話すぞ」

北欧神話の世界観は複雑で錯綜している。氷と炎がぶつかって誕生した宇宙の中心にあって、宇宙を支える巨大なトネリコである世界樹ユグドラシル、その中にある神々の住む世界アスガルズ、巨人族の住む世界ヨツンハイム、人間の住むミッドガルドなど、計九つの世界で構成されている。

そして、同じヨーロッパの神話でありながら、南のギリシアとは異質な所が神々が“不死”ではない。不死どころか滅んでしまうのだ。

ある巫女が世界の創造から終末、そして再生までを、最高神であるオーデインに語る。

“———神々はラグナロク（滅び）に向かう———”

そして、その終末こそが、ことあるごとに対立を繰り返してきた神々と巨人族の最後の戦いラグナロクであり、最終的に神々は敗北し、世界と共に滅びるものだった。

「ここまでが北欧神話の内容じゃ。わかったかのう？」

「……なんとなく。まあ、ようは宿命的にその神さまたは滅んだって事だろ」

「穿ち過ぎではあるが、まあよい」

「でも、その話と俺の事がどう関係しているんだ？ この場所がその神様の世界だったのはわかるが、それにしたって俺がここに居る理由にはならない」

「先ほど言うたではないか。最後の戦いに備え、神々は“アインヘリヤル”をこのワルハラに集めた、と」

「……あー、日本語でわかるように説明してくれ」

「“死せる戦士の魂”じゃよ。神々は来る日に備え、戦場で散った勇敢な戦士たちの魂を集めた。そして、このワルハラで昼は武芸に励ませ、夜は宴をもようした」

「……いや、全然わかんねえ」

「……むう。もう少し話していたかったが、仕方があるまい。つまりお主は———“死せる戦士の魂”と同じ現象に陥っておるのじゃ」

「おおっ」

無表情のまま、声だけで驚きを表す。そんな俺の反応が予想外だったのか、彼女は眉を顰め、目に見えて落胆した。正直、興味が持てない話を延々と聞かされて飽き飽きしていた。

「……………なんじゃ、それだけかのう。もっと、こう、驚愕の顔を期待しておったのに」

「いや、そんなこと言われてもね。俺、戦士じゃないし、勇敢でもないし、ましてや戦場で死んでないから該当するわけないし」

「昔はな。だが、今は少々その条件が緩くなっておつてな。先ほどいうたろう、神は世界と共に滅んだ、と。そう、神の住む世界は滅んだのじゃ、このワルハラを残して」

「それでも理由にはなっていないよ。ほら、えーと、ここに運ぶ役割の……………なんて言ったっけ？」

「ワルキューレ。…ほんと、お主は聞いていたのか、聞いてないのか分からのう」

「聞いていたよ。ただ、忘れていただけ。で、その人たち居ないんじゃないあ、ここに来れないんだろ？まさか、望んで来れるわけないし、迷い込むなんてありきたりな事もないだろう」

「それが、あるんだよ。このワルハラは、神が滅んだあとでも戦士たちを受け入れる機構だけは残っておる。ただ、運ぶ者たちがおらぬだけ。つまり、条件さえ満たしていれば、誰でも（・・・）ここ（・・・）へ（・・・）迷い込んで（・・・）くる（・・・）ことがあるじや」

「いやかしねえ。条件が当てはまらないだろう。何度も言うが、俺は戦場おろか剣なんて物騒なもの手にしたことないし」

彼女は軽蔑交じりの、呆れた視線を投げかけてきた。

「だから、条件が緩くなっていると申したではないか。限定的なものではなく、純粋な条件になったのだ。——つまりじゃ、どんな実力さえあれば、それに該当する。お主は言ってたであろう、宝くじとやらに当選して富を得たと。それがたまたまであろうとも、お主自身の力によってなし得た結果。実力だ。よく言うではないか、運も実力の内、と。その条件を満たしたイチヨウ、お主は“運よく”ここへ迷い込んだ。そして、あの夜、またもや“運よく”持っていた火の炉によって生き延びた。そう、その強運こそがお主の力そのものじゃ」

彼女は色めき立っている。こういう時は、黙っているのが得策だと理解している。たぶん苛立ちが隠しきれていないのは、俺の頭の悪さによるものでも、そうそうに決を求めたことでもなく、“運”だけで生き延びている俺自身に対してだと思う。

「兎に角、真相はどうあれ、だいたいの所は理解できた。どうみても死に体であったお主は延命できた。後は、このまま元の世界に返せばよいと思ったのだがな」

「まだ何かあるのか？ いい加減、俺の質問に答えてほしいだけだな」

「それは、私の質問に全て答えてからじゃ」

彼女はなにか新しい玩具を見つけたように、こちらの顔を覗き込む。

「して、イチヨウ。単刀直入に話が――――我と契約せぬか？」

3

目覚めてから一週間が経つ。

この島での暮らし方に未だ戸惑いと疑問を抱えながら、なんとなく過ごしていた。

現実味がないというのだろう。これまでの人生は、社会の流れというのだろうか、その流れに乗って生きてきた、そんな毎日だった。

そんな生き方に慣れてしまったせいかな、今の自由な生活をハッキリと認識できていなかった。

ただ、『あっちの世界』では隠居を決め込んでいたのだから、今の状況と大して変わらないのだから、これはこれでいいのかな。

「でも、やることがないってのは、それはそれで辛いなか」

当初は、いま寝泊まりしている館内をうろうろしたり、この島の探索など、暇つぶしには苦勞していなかったが、一週間も持たずに飽きてしまったのだ。そんな訳で、ここ三日前からは完全にダメ人

間な生活を送っていた。

そして今、眼前に広がるのは海。海。海。

その水面に浮かぶ木の端キレを見据える。波も穏やかでどこかに流れていくわけでもなく、ぷかぷかと漂っている。今の自分を表現するならこんな感じであろう。

「……あー、暇だ」

釣竿を片手に胡坐をかきながら、煙草をふかしている。

ここでの生活は快適といえば快適だろう。食事が出るし、寢床もある。酒だってあるし、煙草だってある。娯楽品だって揃う。

しかし、こんな孤島でしかも別世界なのに、どうしてこんなにも物が揃うのかといえば。原理はよく分からないが、何でもあっちの世界から持ってきている、らしい。

それを聞いたときは、半信半疑で、試しに煙草を頼んでみた。すると、その言葉を言う前に手元に煙草が現れたのだ。驚いたことに頭の中でイメージするだけでこちら側に届く仕組みらしい。

ふざけてるとしか思えない仕組みだが、そこは流石は神様が住んでいた世界。

ここ、ワルハラは戦士たちが夜に宴会を楽しむための場所だったらしく、食料や酒といった宴会には欠かせない物資は不足させるにはいかなかった。英気を養わせるにはそういった事が必要だと分かっていた神々はそのための仕組みを創り、その名残が未だに残っている結果が今の現象との事。

なんでも有りだなと呆れてたが、これはこれで都合の良いシステムでもある。いや、良い事しかないだろう。

宝くじに当選したのに一円も使えず悔しかったが、その見返りがこの『神の遺産』。金を払わずに好きなものが手に入る。二度、死にかけたのもこのためだと思えば安いもの。まさしく、ここはヘブン。そう、確信した。

ただ――――

「どうじゃ、何か釣れたかの？」

この島の主によって我が野望が全て潰えてしまうとは予想していなかった。

「む。どうしたんじゃイチヨウ。運だけが取り柄のお主がオケラとは」

バケツの中を覗き込んで、そんな事を言われた。

運だけってところは認めるが、魚が釣れないのは運の問題以前の理由があると思う。

はつきり言って、釣りなんてものは子供の頃にちよつとやったぐらいで、仕掛けどころか結び方すらわからない。餌だってその辺の虫を捕まえて使ってるから、これで魚が食いつくとも思えない。素人同然なのだ。だから、これは恰好だけ釣り人であって、本当に魚を釣ろうとしている訳じゃない。単なる思い付きでやっているだけなのである。

「……むう。我（われ）が話しかけているというのに返事もせぬとは。——まだ、怒っているのか、イチヨウ？」

好きなものが好きなだけ手に入る。

俺はこの世界のシステムを利用して欲しい物を次々要求した。車、バイク、テレビ、パソコン、ゲーム、漫画、娯楽品、嗜好品など欲

しかつたものを片っ端から。

そして、それらは全て叶い、手に入れた。

感極まった。次々と叶う夢のような出来事。まさしく、神の所業だと。今まで神様なんて信じたこともなかったクセに、自分の部屋に神棚を飾ってしまうほど嬉しかった。：信仰する方向が違うが、そこはほら、とにかく気持ちを表したかったのだ。

———けど、世の中そんなに甘くはなかった。

電化製品に使う電気を賄うために発電機を起動させ、セッティングしようと部屋に戻った瞬間、外から爆発音が聞こえた。

何かあったのかと思い、急いで部屋の窓から外を見る。

音の発信源である場所からは黒い煙を挙げながら燃えている発電機が見えた。

どうして？と呆然と燃える発電機を見ている事しか出来なかった。不良品だったのかと思いましたが、発電機が切り裂かれたような跡があることに気付く。それも、獣の爪痕のような跡。明らかに何かによってつけられた跡だ。

ただ、犯人が誰なのかを考えるよりも早く火を消さないと館に燃え移ってしまいそうだったため、急いでバケツに水を入れて外に出た。が、外に出た瞬間。今度は別の場所から大きな音が聞こえた。方角的に車とバイクを停めていた方向だ。次々起こる怪奇現象に何がどうなっているのか分からなくなった。

とりあえず、発電機を消火してからと思い、火元に水をぶっかけて新たな不安の下へ走った。

そして、着いてみると停めていた筈の車とバイクが消失していたのだ。

傷がついてたり、へこんでいたならこの島の野生に動物の仕業と思えたが、消えてしまったては説明がつかない。まさか、乗ってどこかに行ったなどと考えたくもない。

もう、笑うしかなかった。

突如、燃え上がる発電機。消失する車。どこかの都市伝説でもあるまいに。

俺はどこぞの探偵のように推理して犯人を見つけるなんてことは出来ない。むしろ、最初の被害者になるような立置にしかねない。だから、奇妙な館が建つ孤島、なんてミステリ小説でよくある設定だからといって不可解な事件が起きるなんて現実には認めない。起きるのは物語だけにして欲しい。

もう、笑うのも疲れた。

誰でもいいから探偵役の人出てこい、と独り呟く。

そんな願いが叶うかのように、背後から足音がした。が、それは探偵ではなくこの発端の犯人その人だった。

『イチヨウ。好きなように過ごしてよいとは言ったが、あのような五月蠅い鉄の塊や目障りな箱の乗り物と馬は今後駄目じゃ』

と、犯人が自首してきたことによって呆気なく解決してしまった。

そして、その犯人からのお達しにより、電気を使用する全ての物は使用不可。車とバイクに関しては、海の藻屑と消し去られた。

後は言うまでもない。

多趣味でもなかった俺はやる事が無くなってしまい、こうして暇な毎日を送っているのだ。

「まったく、あれから幾日も経っているというのに。…いい加減機嫌を直したらどうじゃ」

「…………俺のインパラとハマーは帰って来ない」

「……根が深いのう。……根暗、いや、根の国出身か？」

「根の国ってのは知らねえけど、根暗ではない。…それと、今はその事で機嫌が悪い訳じゃない」

「では、なぜ顔色が優れないのじゃ？」

「……………」

まさか、悩んでいる、なんて口が裂けても言えない。

彼女から持ちかけられた提案———契約。つまり、従者にならな

いかという話についてだ。

従者というのは簡単な話その主の剣となり盾にもなる、いわば護衛のようなものだが。俺にそんなこと出来るはずもなく、せいぜい盾になるかどうかしかない。一応その事について説明はしたが、それは理解したうえで契約を持ちかけてきているらしい。

自分で言うのもなんだが、俺は運が良いだけで後は何もない人間。それも常に恵まれているワケでもなく、あえて言うなら悪いと言える。正直、どこをどう見てもメリットがない。

それでも、彼女はそれでいい、と言った。

それが今、悩んでいる理由。単純な話、疑心暗鬼に陥っている。そのせいで、未だこちらの質問はおろか、名前さえ教えてもらっていないのだ。

「……なあ。何度も聞くけど、なんで俺に契約を持ちかけたんだ？」

人間には扱うことが不可能に近いという火の炉。俺の体には心臓代わりに——その火の炉が宿っている。免疫抑制剤なしで拒絶反応が全くないという、現代医学の理論をすっ飛ばした奇跡。その成功体である俺はいわば、貴重な実験材料に他ならない。

彼女の事を信じていないワケじゃない。ただ、衣食住に困る事ない生活を提供し、彼女の話信じるのなら、契約したところで何か服従を要求するわけでもない。不満な所なんて少ないくらいだ。

けれど、それが故に不安になってしまう。無償の好意なんて、普通はやらない。それを行うとしたら、どこかで利益を求めていると考えるのが妥当だ。ほら、よく言うだろう。タダより怖いものはないって。

「そうか。お主はそれで悩んでおったのか。…ま、確かに何も益にならないのに何かを与えられては不安にもなろう。——だが、前にも言った通り。お主の心臓に擬態した火の炉、それ（・・）に（・）ついて（・・）は（・）我は興味がない。それに、これは単にお主自身に対しての興味による誘いじゃ。だから、そのように警戒せんでもよい」

自信たっぷりには彼女は言う。

いつでも芯の籠った言葉。今の俺は彼女のそういった所を抛り所にしている節がある。

確かに彼女は“嘘”は言っていない。今の自分自身は信用できないが、彼女の言葉は信じられる。それも、勘違いだったとしても彼女のためなら、それ位は許容してもいいと思えるぐらいに。

少し思考に耽る。

「…わかった。信じるよ。少なくとも“嘘”は喋ってないと思うし」

迂闊に判断することではないとわかっていたが、もう、一週間も待ってもらっているんだ。この辺りで返事をしないと失礼だろう。それに、悩んだところで答えなんて決まりきっていたんだ。ただ、今まで返事をしなかったのは、気持ちの問題で——踏ん切りがつかなかっただけの事。でも、今の彼女の言葉を聞いて決心できた。

「—————以外にあっさりと信じるのな」

やはり、唐突過ぎたようだ。彼女は面を食らったように目を見開いていた。

急なことで悪いとは思うが、俺の場合こうでもしないといつまで経っても返事は出せない。後で改まって話そうとすれば、確実にその間に決心が鈍ってしまう。だから、勢いそのままに突っ走るしかない。ほら、それって若い奴の特権みたいなものだし。

「……まあ、よい。承諾した。—————だが、イチヨウ」

真剣な面持ちで此方を見る。

「お主のそういう所あまり喜べたものではないぞ。やり直しができればよいが、それが利かないような事になってからでは遅いのだから」

「……………。わかった、善処する」

「うむ。……しかし、馬鹿な者は好きにはなれないが、馬鹿をする者は————我は好きじゃ」

ふわりと笑みを零す。好き、なんて言葉を面と向かっていうほうも言うほうだが、それを聞いて赤くなる方も馬鹿である。

彼女の顔を見ていられなくなり、

「——っ。うるさいっ！いいから、俺の気が変わる前にさっさと契約を始めろ！」

「？褒めてやっておるといいうのに何をおこっておるのじゃ？さっきまではあんなに——ああ、そうか。お主もれっきとした雄であったということか。うむ、そういうことならばもっと近くで見ればい

いだろうに」

そういつて金色の目が近づいてくる。

「——ちよっ。近い、近いって！」

「何を躊躇する。イチヨウだって、こうしたかったのではないのか？」

「——っ。待て、俺がいつそんな事を言った——あ」

何か、捕食されるような目をしてこちらに忍び寄る。いきなり迫る顔から逃げるように後ずさるが、伸びてきた手によって容赦なく自身が押し倒される格好へなってしまった。

悲しいかな。自分より背の低い女の子を押し返すどころか抵抗すら出来なかった。

今までこんな事を体験したことがないために、頭の中は混乱している。手足は自由だったが、ピクリとも動かせない。ただただ、この状況を受け入れてしまっている。

「ふふ。喜べ、イチヨウ。我は自分の物は愛でる体質なのでのう。
お主の事もしっかり可愛がってやろう」

這うように距離を縮めてくる。

それは捕えた獲物を捕食する前、肉食獣の在り方に似ていた。

つう、と徐々に足から上に指先が触れてくる。下から上へと舐めまわすように獲物の味見をしている。

俺の腹部に跨った彼女はそっと頬へ彼女の手が触れる。

頬から伝わる彼女の体温が全身へ広がってくる。その感覚に、恍惚（ゾクリ）とした。

「————俺はっ……物じゃ、ねえ……」

全身へ広がった体温が自分の体温と混ざり合い、とても熱い。なんとか、抵抗の意志を見せるがしまりの悪い声では説得力もない。

「なに、我と契約するのじゃ。それなら我の物じゃろう？」

心の奥深くを見据えるよう、金色の瞳は此方の瞳をジッと覗き込んでくる。視線と視線が交差する。

——そうしているうちに、ようやく俺の体は動いていた。

「あ……………」

押し倒せれるほどの力があるとは思えない程、小さくも綺麗な手を握ると彼女は僅かに息を漏らす。

はらり、と揺れる白い髪。

そのまま彼女の白い頬に手で触れると彼女は、此方に優しく微笑してくる。

「——ようやく、雄らしい顔つきを見れたのう」

滑らかに動いてしまう体と裏腹に、内心首を傾げるほどに違和感を覚えている。

俺の体はさっきから何やってんの？

あの彼女いない歴〓年齢の小野鎖一葉なのか？

あの女子の前では無愛想にしかねない奥手野郎なのか？

例えそうだったとしても、これ程積極的な男だったろうか？

後生だ。この記憶を消してくれ。

“—————なら、俺に惚れたか？—————”

白く小さな顔に見据えながら口走る。

悪い。間違えた。

誰か殺してくれ。この勘違い男を殺してくれ。

「————っ！……お主！」

触れる手がくすぐったいのか、彼女は飛び引くように体を起こして

俺から離れていく。こちらも体を起こし、彼女に視線を送った。何かに驚愕したような顔で此方を見ていた。

一時の勢いに流されるのは良くないというが、今の状況がまさにそれだ。

二十年も生きてきたけれど、女性とは実際のところ、ここまで接近したのは初めて。つまり、女の扱いが判らないのである。だから、彼女が驚いた顔をして此方を見ているのか、さっぱり見当がつかない。

「…………ごめん。変なこと口走った」

気の利いた事を言えない。こんなことしか言えない自身に悪態をつきたくなった。

すると難しい自分の顔の表情を察してか、呆れたような微笑みで、その白く綺麗な声で、

「のう、イチヨウ」

ただ、名を呼ばれただけだというのに、俺の思考を完全に停止させる。

ドクンと心臓が跳ね、近づいてくる彼女の顔から目が放せない。

冷や汗が背中を伝った直後。

「我の名は——フローズ。フローズ・ヴィトニルじゃ」

しっとりとして唇から割って出てきたのは、鼓膜に響く暖かな声。
初めて味わう感覚に思わず眼を見開く。

「……フローズ……」

「そう。我がお主に渡せる唯一のモノじゃ。——大切にせよ」

自身の瞳に意志はなく、まるで景色を見つめるかのように眼前の金色の瞳を見続けている。何か魔力に惹かれるように、こうしていた
と思った。

けれども目の前の美女は切なそうな表情を見せ、そのまま立ち上がる。

「契約成立じゃ。これでお主は私の従者であり、我はイチヨウの主となった」

「……………え？」

何がどうなっているのかはよく分からない。自分が想像していたモノとは違う。

「ちょっと。……………これで終わり？」

「なんじゃ。契約が成立したというのにまだ、不満があるのか？」

「いや……………想像していたのとは、なんか、違くて」

「……………お主は何を勘違いしておる。さっきのは単にからかっただけじゃ。お主の反応が面白くて、つい、調子に乗ってしまったがの」

そんな言葉に彼女————フローズは溜め息をつき、蔑むように此方を見た。

「まあ、イチヨウは魔術的な契約と何かと勘違いしているようだが、あれとこの契約は違う。これは信頼関係の上で成り立つ契約。いわ

ば口約束のようなものじゃ。主は絶対的な命令権を持つわけでもないし、命令を拒否できない制約があるワケではない。だから、お主からいつでも契約を破棄することは出来る。ただ、主である我からは破棄することが出来ない。契約が本来あるべきの形のものじゃ」

「…はあ。…でもさ、それって何か違くないか？それじゃ、誰だって破ってしまつて、契約の意味がないだろ？」

「だから信頼関係が必要なのじゃ。お主は我の事を信じると申してくれた。ならば我もその誠意に応えてイチヨウの事を信じる。――ほら、これで契約はなつた」

「……なんか詭弁じみた物言いだな」

「ふん。魔術による契約の方が詭弁だと我が思うがな。従者の裏切りを防ぐためだなどと言いおつて楔を打ち込むなど。裏切られた者が単に裏切つた者を見る目がなかっただけではないか」

それも一理あるが、裏切らないという証拠が欲しいのも事実。いくら、お互いに信頼していたとしても、些細な言葉、理解できない行動をされては不安になってしまう。自分を嫌いになってしまったのでは、不満があるのでは、もしかして裏切るのではないか。ほんの少しの迷いや不安。相手を信じ切る事の難しさ。それが、フローズの言う魔術による契約が生まれた要因だろう。

「その点、我は見る目はあると自負しておる。じゃからお主と契約した」

「そんな根拠はあるのか？今は裏切るなんて気はないけど、時間が経てばどうなるかわからない」

「根拠はない。ただの勘じゃ」

……なんていうか、ここまで潔い返答をされると溜め息も何もない。

「……いいよ、わかった。自分の事は信用できないけど、お前の言葉なら信じられる」

「うむ。よろしく頼む、我が従者よ」

こうして、彼女との契約はなった。彼女の信頼にどれだけ答えられるかわからないけど、こうやって笑う彼女はとても綺麗だった。

もうすぐ、日が上まで上る。

太陽の光のした立つフローズを、俺はただ眺め続ける。

思えばそれが、彼女のためになりたいと思った、最初の時だった。

本土にて



“で、その後どうなったの？まさか生きてたってワケじゃないわよね？”

“うん、その倒れていた筈の男は忽然と消えてね。一応、警察も出払って目撃者の事情聴取したり、搜索もされたりしいんだけど、全く見つからなかったんだよ”

“なによそれ。単なる集団で錯覚しただけじゃない”

“うーん。僕も最初はそう考えたんだけど、その後に風の噂で聞いた話がね、妙に引くかかるんだよ。単なる与太話にしちゃ出来過ぎているっていうのかなって”

“風の噂ね。…どこから仕入れたのか分からないけど、そういう事件が起きた後には変な噂が流れるのはよくあることでしょう？”

“ そうなんだけどねえ。だけど、どうしても気になるんだよ。こう、僕のジャーナリストとしての血が騒ぐというのかなあ ”

“ 変態としてでしょ。……まったく。今回は少しはまともだと思っただけど、あんたが変にやる気出る時は碌な事にはならないなあ。……ああ、鬱だ ”

“ ひどいなあ。話だけでも聞いてくれてもいいじゃないか ”

“ ……コーヒー入れてくるだけよ。それにどうせ、聞いても聞かなくても連れ回すんでしょ？ ”

“ おおっ。それでこそ僕のパートナー！ 長年連れ添っただけの事はある ”

“ ……はいはい。で、噂ってのはどんな内容なのよ？ ”

“ ん？ ああ、それね。でも、その前にこの情報を耳に入れといった方がいいね。——これは警察の知り合いから聞いたんだけどね。目撃者である十一名からの証言はさっき話した通り、突然倒れた男が忽然と消えたという事らしいんだけど、そのどれも食い違い（……）が（……）なかった（……）。まったく言っていないほどにね ”

“：何が言いたいのよ”

“あれ？これじゃあ解らないか。：んー、もし、仮に錯覚のようなものを集団で見たとすると、どこかに必ず綻びがある。錯覚というのはある意味妄想のようなものだろう。その妄想を集団で見たとして共通点はたくさんあったとしても全てが同じなんてことはあり得ないだよ。ほら、集団無意識っていう過程はどうあれ最終的に行き着く場所は同じだっていう学説。それで考えれば、この証言は納得できるけど、少しおかしい。誰か一人でも男は立ったまま消えたとか他の証言と結果は同じだけど過程が違う事を話せば、集団錯覚だと僕も納得できる。ましてや、突然人が消えるなんて現実的に考えてありえない事を見たんだ。だけど、皆同じ証言で同じ結果へ向かう。それはつまり――”

“真実に近い……なんて言いだすんじゃないわよね？”

“違うよ、真実そのものなんだ”

“馬鹿馬鹿しい。空想論でしかないわ”

“でも、キミだって少なからずおかしいと思ってるんじゃないのかな”

“……………”

“ うんうん、やっぱり優秀なパートナーだよ、キミは。確かにその通りで、これは僕の空想論でしかない。これを僕もそう思った。――けど、その後に耳にした噂がよくない。単純にその消えた男が化けて出たとか恨みを持たれていた人物が死んだとかなら、まあ、そこまで気にならなかった。でも、僕が耳にしたのが、その消えた男は生きていて普通に暮らしているって内容だ”

“ 別段、おかしいことはないと思うけど。よくある噂として流れそうだし”

“ 目撃者の証言に男は倒れたって出てくるだろう。倒れるってことは何かあったんだよ。何か持病を持っていたり、突然脳梗塞に陥ったりとか心臓発作、とか。ただ、噂の内容から考えれば、それは考えられない。仮に脳梗塞や心臓発作で倒れたとするなら、何らかの処置しなければ確実に死んでいる。事件近くの病院に掛け合ってみたけど、その事件の日には急患で運ばれた人も来た人もいない”

“ 貧血で倒れたって考えないの？”

“ そうなのかもしれないね。けど、それでも謎が残る”

“ ……あんたは、なぜ消えたのか、なぜそんな噂が流れるのか――つまり、何かある。そう、思ってるのね”

“簡潔に言えばそんな所。ね、興味が湧いてくるでしょ？だから一緒に調べてよお”

“……まあ、いつも持ってくる話よりはマシなのかな”

“うん、サプライズのね。最近はマンネリ気味だったし、たまにはこんなのもいいかなって”

“なら、もっと全うな仕事見つけてこい”

“不満？……んー、後あるのは、痴漢が多発する地下鉄列車が消えたとか、獣姦を好む人間たちが集まった村があるとか。——こっちの方に行く？”

“……消えた男の話でお願いします”

“うんうん。僕としてもこっちの方がモチベーション上がるからいいね”

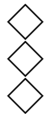
“あんたにモチベーションなんてモノがあったのか、この異常性癖者め”

“異常ってところは認めるけど、そんな性癖はないよお”

“嘘つけ、前に調べてた事件も興奮しすぎて勃起した上に射精していた男がいう事か”

“……仕方がないだろう。あんな面白すぎる事件を調べてたらみんなそうなるって”

“あんた以外にそんな事になる人間は私は知らねえ”



『ワルハラ奪取の任を解く』

狭い屋への真ん中に置いたソファーに寝転がったまま、阿笠久遠は
睨む。
あがさくおん

午後十一時。ようやく解放されて家であるマンションに帰ってみると、この手紙が入っていたのだ。

あれから一週間、孤島から初めての帰ってきた“生還者”として政府からの質問の応対に明け暮れていた。毎度のように同じ内容を話し、また別の質問者に同じ内容を話す。部屋に帰りついても質問する声が、朦朧とした頭の中でまだ反復し続けていたのだが、その文面を見た途端、ハッキリと目が覚めてしまった。

「……………はは」

紙に書かれた文字を何度も読み返しても同じ意味でしか読み取れない。

持つ手には力が入る。

気づけば神は皺くちやになっていた。そのまま投げ捨てた。

封筒の方を取り上げ、見直してみる。

何の変哲もない茶封筒である。消印の日付は昨日———三月三十日。発送場所はI市内のようだ。

当たり前だが、差出人の住所はなかった。封筒の裏にはHNの二文字。

「…………ハは、ははハはは」

見た瞬間に抑えることが出来なくなった。

肩を揺らし、拳を額に当てながら乾いた笑い声を漏らす。

この者にとっては手紙の内容も差出人も心底笑えるようだ。

————何をいまさら

俯いていた顔をあげ、笑いの対象である茶封筒を見る。故意にやったのか手紙同様に潰してしまっている。

ソファーに凭れ天井を仰ぎ見た。

私が生まれた時、既に自身の未来は決まっていた。

人類は過去に生み出した勇敢な戦士たちを生み出すだけの生命としての能力を失い、衰退の一途を辿っていた。

そんな中で私の故郷は透明な液体に満たされた試験管のようなカプセルの中。

現在の人口は六十億人超。それも一秒ごとに増え続けている。

科学の進歩、という事だろう。

過去に不治の病と呼ばれた病も空を飛ぶことも、人は時間の経過と共に乗り越えてきた。

人生五十年、とは過去のものになり、今ではその倍を生きる人も珍しくない。

今の現代は人にとって過ごしやすい環境となっている、いや。人の手によって成されてしまっている。

科学者なら、これは人類の英知の結晶だ、なんて言うかもしれないけど、私にとってはそんなものなのかと思う。ただ、そんな他人事のように感じている自身も、その人類の英知とやらの結果に生まれた一人だ。

遺伝子操作による優秀種、劣化していく人間の遺伝子の良いところだけを残し悪いところは無くしてしまおう、という実験。コンセプトとしては過去の英雄たちを生み出すという事ではあったが、最終的な目的は兵器としての活用である。

今の時代、無人爆撃機を遠隔操作によって空爆もできる上に、そこいらの人に銃の一つでも渡せば人を殺すことが出来る。

最たる一人の人間より、より平均的な数の戦力の方が勝るというのに、今さらになって、なぜ、時代の逆光をするのだろうと思える。

しかし、そこにはちゃんとした理由があったようで。私たちは兵器としての活用よりも、その前の過程にこそ本命が隠れていたのだと、あの孤島へ向かうことが決まった時に気づいた。

そうだ。私たちは最初のコンセプト通り、英雄になって欲しかったのだ。

「…………ハハ、はははハハハはは」

けれど、結果はどうだ。

最高の環境で修練に励み、最高の友と最高の指揮官と共にあの孤島へ向かった。望み通り英雄にでもなんでもなってもやろう、と。

周りの思惑など関係なかった。負ける理由も道理もなかった。万全を期していた。しかし。

———敗走

戦力的撤退ではない。次に繋がる負けでもない。———ただの負け犬。

戦略的におかしかったワケでも誰かがミスを犯したわけでもない。単に負けるべくして負けた、ただそれだけの事。

過去のデータからの確な作戦をたてても、三年間、血の滲むような訓練を行った所で、それは無意味。戦略の問題でも時間の問題でもない。

これは人員の問題だ。

私たちが生み出された理由、“過去”の英雄を生み出す。そんな人間に挑ませようとした時点で間違いだったのだ。

過去の戦士達。戦い方こそ違うが、彼らは立派な戦士だ。しかし、その彼らはあの孤島に挑んで勝利したのだろうか。

答えは否。

そもそも勝っているのなら私が生まれることはない。勝てないから生み出されたんだ。

そして、その勝てない者たちを模して造られた私たちが、あの孤島に挑んで勝てるはずがない。いくら最新技術の武装をしたところで、過去何千万と繰り返してきた先人たちを超えることはできない。その負けの遺伝子が私たちの中には組み込まれていたのだ。勝てる道理など最初からなかった。

“…そう。同じことを繰り返すようでは新しい時代とは呼べない。でも、最初の時点で過去と同じ過ちをしているのだよ、貴様の言う完璧とかいう計画は”

孤島の主の言葉。その真意に気づいたのは孤島から必死に逃げている時だった。

近くの海岸に着けていた舟へ乗り込み、キーを回す。ごう、と逞し

い駆動音。

震える手で操縦桿を握る。背後からは断末魔のようにあがる叫び声。あんなに頼もしいと思えていた舟の装甲は、その叫び声で軋むように、その時ばかりは頼もしいなどと微塵も思えなかった。

何で失敗したとか、どこで間違えたとか、そんな事が頭の中をぐるぐるして。でも、逃げないといけない。逃げなくっちゃ、て思ってた、無我夢中に舵をとっていた。

見捨ててきた仲間の顔が浮かぶ。隊長の逃げろという声が木霊する。

なんでだろう。

震える体は悔しからのモノだろうか。

舵をとりながらも絶対に後ろに振り返ることはなかった。

“振り返るな、仲間を見捨てた自分にはそんな権利はない。そんな無駄な事をして自分が死んでしまったら、彼らは無駄死になってしまう。後悔も悔しがるのも後でいくらでもできる。だから、今は生き延びることだけを考えろ”

そう、自身に言い聞かせて言い知れぬ感情から来る身体の震えを抑え込んだ。

そうして、幾分経っただろうか。

空は星ひとつ見えない真っ暗な色から仄暗い青に変わっていた。

ああ、もう日が昇る。

それがわかった瞬間、何の確証もなく助かると思えた。

暗闇の海に光がさす。少し休もうと腰を下ろす。持たれた壁によって肌と密着する服は汗でびっしょり。

けど、気にしない。今は疲れ切った体を休めたかった。

窓から眺める太陽の光に目を細めながら、いつしか笑っていた。

その笑いがなんなのか、どこから来るものなのか。考えるまでもなかった。

安堵している。

島の奪取に失敗した屈辱よりも仲間を失った悔しさより先に自分が無事であったことに安堵してしまっていた。

だから笑える。

あの島の主の言葉が無防備な頭の中に入り込む。

そうして気づいた。とても納得できる答えに。

自身は、どこぞのピエロもびっくりな役を見事に演じたようだ。しかも、この役はどうやら自身が生まれた時から決まっていたもので。

つまり、私たちは演劇を彩るための脇役――

その後、何とか帰還できた私は、蔑まれることもなく、罵る言葉も浴びることなく、寧ろ、凱旋のような歓迎を受けた。あまつさえ、『生還者』などと祭り上げられる始末。

どんな汚名も被ろうと覚悟していた私にとっては、何とも拍子抜けで。それは単純に罰を受けるよりも耐え難い苦痛であった。

なんだか声を張り上げそうになったが、周りの雑音のおかげでそれはしなかった。

励ましや労いの言葉。質問者とその内容。

聞こえてくるのは同じような事ばかり。まるで、それしかできないブリキのようで、ひどく気持ちが悪い。

負け犬のように逃げ帰ってきたというのに、誰一人として悪態を言うことはない。もう少し気を利かせてくれてもいい筈だ。

こんこん、と密室のような部屋に鳴り響く。

いや、事実この部屋は密室で私を逃がさないための牢獄。あるいは拷問室。白で統一された壁は反響こそするが、外には漏れない完全密閉型。こつこつ、と足音が此方へ近づく。

今日で来訪者は、三十六人目。

しかも今日は九人目だ。もう鬱陶しくなってきた皆同じ顔に見えてくる。

そんな風に見ていて思い出されるのは、やはりあの台詞。

今なら、その真意が少しわかったような気がする。

どんなに文明が発達しようと、どんなに平均寿命が延びようと、どんなに空よりさらに上に行けるとしても、人が変わらなければ、何も変わらない。ただ繰り返すだけ。意味がない。

だから、こうして同じような答えを喋っている。

過去の人間の写し身である自身は、その大元なのだと気づいたからだ。

そうして始まったのは、いつもと変わらない質問内容。私は一字一句、毎度の如く違えることなく答えた。

ピエロはピエロらしく、役を演じればいい。

暗示をかけるように自分で自分を演じ続けた。

正直、馬鹿げてると思えない。でも、そうでもしなければ自我を保っていられなかった。

正常を保つために狂気に走る矛盾性。

内心、腹を抱えて笑いたかったのは内緒。

でもでも、ほんの少しだけ希望はあった。少なくとも、まだチャンスはあると思っていた。

——けど、そんな希望すら持つことを許されない存在にまで堕ちてしまっていると、あの一通の手紙に気づかされた。

“ワルハラ奪取の任を解く”

これを笑わずしてどうする。

仲間の死も耐え忍んだ屈辱も、たった一文で藻屑にされたんだ。

怒りを通り越して笑えてしまう。ほんと、笑える。

「……アハ、ハハはハハハハ」

周りの人間は疎かったが、上の人はよく現実を理解していたらしい。一度失敗した者は用済み。直接言わず、こんな手紙で連絡してくるのも頷ける。

けれど誓って、私は本気だった。

もう一度があるならば、何としてでも成し遂げる覚悟。

だってそれぐらいしか、私には残っていないから。

———十分、二十分だろうか。

笑い声なのか呼吸音なのか判らないケタケタとした声が部屋中を漂う。

未だ阿笠久遠は虚ろな目で天井を見上げている。

復讐。———そう、復讐だ。

私は、この呪いを。過去の呪縛を断ち切る。この復讐の名の下に。

過去を越えての決着。

紛い物とはいえ過去の人間である己にそれができるはずがない、ということも、十二分に承知している。けれども、そういった理由でもって感情を制御するのは不可能だ。――感情？ いや、そんな生半可なものではない。それは断じて違う。

単なる一過性の激情ではない。

それはもはや私の魂の叫びであり、生きる拠り所であり、存在証明でもあるのだった。

月の魔力。焦がれる心。

明かりの無い部屋を出た黒い影は、ゆっくりと、暗闇の中に身を投じた。

／獨白思考

『阿笠久遠。三月三十日、I市内にある自宅へ帰宅後、消息不明。動機に関しては現在調査中。“彼女”は組織内重要機密を保持している模様。漏洩を防ぐためにも早急に手を打つ事を推奨する』

いつまでもダラダラと降りつづける雨の中、雨音とはまた別の無機質な音が部屋に木霊している。

雨は二日前から降りつづけ、あいにく今日もパラパラと雨足を立てていた。

あんまりにやることがないから傘でも持ってその辺をブラブラしようかと思ったが、雨の日にそんな物を持って出るのは自分の主義に反すると断念。外に出るなら傘は持たない方がいい。もし、一人暮らしの頃ならば迷わず出ていたが、それでもし風邪でも引いてしまったら大変。彼女の前でそんな無様なことは出来ない。————けれど俺は雨に濡れるのが……好きなのだ。

「おや————。お主の玉将は逃げ場がないぞ」

嘲笑う表情を浮かべ、詰みであると宣言する。

パチッと、気持ち良い音を立てる駒。

占拠されてしまった我が陣地。ここぞとばかりに左右からの双撃。あるいは制圧攻撃。あれほど強固に飾っていた布陣は、今や見る影もなく、虫食いだらけになっていた。

対戦成績、これで六戦全敗。

しかも今回ののは圧倒的だ。なんとか無理を言って相手には飛車角落ちで対戦してもらったというのに、攻めることも出来ず、ただ防戦一方であった。これだけのハンデを貰っておいて無様に負けてしまっっては、再戦は望めないけど、それも仕方がない。相手が悪すぎた。

「随分と慎重な手を使うが、逃げてばかりでは勝てるものも勝てないぞ」

俺の暇つぶしに付き合わられて最初は不機嫌であった島の主は、回を追うごとに饒舌になっていくと同時に容赦のない攻め方になっていた。

「……別に臆病と言ってくれてもいいよ。いや、俺はそれでいいと思うってるけどね。生き永らえるなら幾らでも臆病でいたい」

彼女に応じた俺は椅子の背凭れに背中を預ける。

いつもと同じ真っ白な服。しかし、今日のはやけに胸元が際どいというか、もともと白く綺麗な肌が露出しているせいだろう。自然と視線がそこに集中してしまう。自重せねばと意識するのだが、余計にも気になってしまうのは男の性というヤツだ。

そんな俺の視線を気にする気概もなく、何か気に入らなそうに口を開いた。

「正解ではあるが不正解じゃ。確かに慎重さは実践の時には重要だ。だが、このような演習ではそれだけでは足りない。大胆さを兼ね備えてこそ意義がある」

我が主人は不愉快そうに鼻を鳴らした。

彼女の言う事に関して異論はない。正しいと思う。実践で出来ない事を練習で試み、上手くいけば本番でも活かせるし、失敗してもそれを改善して次に活かすという考え方はよくわかる。しかし、そのまま納得してしまうのも癪なので、少し噛みついてみる。

「でも、結局やられてしまったらそれも意味がないだろう？そもそも努力を重ねたところで絶対に勝てるっていう保証はどこにもないんだ」

愚か者が、と溜め息交じりに言葉を続けた。

「逃げるだけで生きていけるのなら誰だってそうしておる。じゃが、そう出来ないから皆なにかを積みかさねて生きているのであらう。動物も植物も、人というサルにしても、何世代にも渡り、積み重ね、効率よく繁殖しておる。しかし、その積み重ねを止めてしまったらどうなる。それが開拓への熱だったり、探究への意欲だったり、繁殖への情熱だったらどうするのじゃ、愚か者？」

「まあ、それは確かに――――」

――――終わってしまったているな――――

拗ねるようにいう俺は、それ以上答えない。愚者に格下げになってしまった自分には先の言葉を言いたくなかった。

「ふん。黙るのが良策だという事は気づいたか、愚か者よ。じゃが、このような定石すら知らぬ者が戦について口出ししてこようとは。お主の主人を担う我は哀しい。嗚呼、哀しい哀しい。否、これは虚しいと表現した方が良いものかのう」

どうにもご主人様は、俺がちよっかいを出してきたことが気に喰わないらしく、いつも以上にゴリゴリと俺の精神を削る反撃を仕掛けてくる。普段でも棘のある台詞だというのに、毒も盛られたら、精

神衛生上よろしくない。

「そもそもお主は我^{われ}の従者だという事を自覚せよ。戦わなくていいとは言ったが、無抵抗のまま殺れてしまうのはダメじゃ。せめて、あの夜の時のように当てずとも反撃の気概くらは魅せて欲しい。鼠でも追い詰められれば猫に噛みつくじやろう？」

「——あー、あれは正直な話、無意識っていうか反射的に手が出っというか……」

正直なところ、あの時の俺はどうかしていると思う。常識的に考えて俺の取った行動はアウト。相手から手を出されたとはいえ、危害を加えるつもりであったとは断言できない状況で殴ろうとした。

人を殴った事もなければ、喧嘩だってまともにしたことはない。争い事はできるだけ避け、話し合いで解決しよう、が俺のモットーだ。だから、あの時の事に関しては自分の事なのに全く理解できていない。

頭ではなく心で動いたのか、と呟くフローズ。将棋は飽きてしまったように、立ち上がり近くのベッドへ横になる。

「つまり、あの時の行動は分からないという事か……」

「……まあ、そんな感じだ」

横になったフローズは目を閉じ、意識は何やら思惟しゆいに向けている。

「……ホント、お主は何者じゃろうな。運が良いと言えば確かにそうなんじゃが、それだけでは曖昧だな。しつくりこない。まあ、“運”なんて基準が判らないから仕方がないと言えば仕方がないのかもしれないが……」

「基準って、なんだよそれ？」

「例え話じゃよ。——イチヨウ。お主は二度死んで生き延びた。それも、運よくと言わざる負えない形で。しかし、その運が良いとは、どこからどこまでの事を指しておるのか。幾重もの幸運が重なった結果を引き起こした『強運』、たった一つの幸運によって生み出された『奇跡』。客観的に見れば、お主の運の良さは前者である『強運』としてみるのが妥当ではあるが、そもそも運の基準が定まっておらんから実際の所はよく解らん」

俺はかなり混乱した。フローズはそんな俺を情けない子を見る親のような目つきで言葉を続ける。

「ようは多いか少ないか、或いは積み重なった結果か、後付けの結

果かどうかの問題じゃ」

「……はあ」

「まあ、結局のところ具体性はない。難しいんじゃない、運命なんてモノは。視えないくせに、在るのだと思えてしまう。形がないのに、感じることは出来る。……まったく、信じようが信じまいがおかまいなしじゃ」

フローズは投げやりにそういうと、不愉快極まりない表情のまま黙り込む。これ以上は話しかけるな、という事か。

彼女の話す内容の半分も理解できていない自分があれこれ言うのもなんだが、もっとシンプルに考えればいいのではないかと思う。だって、彼女の言う『強運』、『奇跡』はようは周りからの見え方であって自分が思うことではない。目撃者からしてみれば運の良いように見えても、当の本人からすれば、“そんなものか”くらいにしか思えないだから。

フローズはおそらくだが、運というものが曖昧で中途半端な言葉だから怒っている。いや、呆れている風にも見える。ただ、それが彼女だけの特性なのか、それとも大多数の総意によるものなのか。彼女の事をほとんど知らない俺には分からない。

「――」

なんだか置いてけぼりを食らった気分ではあるが、これ以上口を挟んでも仕方がない。

ポケットから煙草を取り出し、取った一本をトントン、とテーブルの上で叩き、詰める。

煙草に火を着ける。

窓から灰色の外を見るが、降りつづける雨はまだ止みそうにない。

肺一杯に吸い込んだ紫煙を吐き出しながら、持て余した時間をどうやって潰すかを考えた。



気がつくのと、とっくに日は落ちていた。どうやら眠っていたようである。ベッドにはフローズの姿は見えず、記憶にない毛布が自分に掛けられていた。彼女が気を使わせてしまったのは明白。彼女への感謝の気持ちの反面、なんとも恥ずかしい気持ちになっていた。

「まあ、あつちは好意でやってくれた事だし、後で礼を言っておかないとな」

毛布を椅子に掛け、よつ、と立ち上がる。頭を振り、残る眠気を払い落とそうとしたが感覚的にはまだ少し眠気がある。このまま眠ってしまいたい気もするが、軽い空腹を満たしたい気分でもあった。

「――さて、何を食べようか」

なんて考えるが、そもそも庶民の舌である俺が美味しいと感じる料理のレパートリーは少なく、ましてや一人暮らしをしてから自炊なんて一度もしていない俺には思いつくのは、速い、安い、美味しいのフアーストフード類しか思いつかなかった。



絨毯が敷かれた真っ暗な廊下を、月の光を頼りに歩く。

眠っている間に雨は止んだようだが、雲は残っている。そんなせいか月も遠慮がちでしか顔を出さない。それで完全な闇よりはマシ。後悔があるとすれば部屋にある懐中電灯を持ってこなかった事ぐらい。

空腹を満たした俺は心地よい眠気に襲われる、ことはなく、寧ろ目が冴えてしまった。最近の不摂生な生活が祟ったのかもしれない。

……まあ、それも仕方がない。暇を弄ぶしかない生活をしていれば墮落もする。でも、昼間に寝てしまうような生活は避けたいため、体を洗ってサッパリすればその内に眠くなるだろうと安直に考え、こうして風呂場へ向かっている。

「それにしても、この館は明かりになる物が一つも置いてないっていうのはどうにかして欲しい」

いくら月明かりが差し込んでくるとはいえ、さすがにキツイ。

「……ええっと、この扉だったよな？」

ドアノブに手をかけ扉を開く。ちょっと不用心ではないかと、ふと思う。俺が居ない頃ならまだしも、現段階ではあまりにも無節操。どちらかが入っていて間違っただら大変なことになる。

「鍵を付けるとまではいかないにしろ、せめて入っている事がわかるようにしないと」

洗面所に入る。

やはりここも暗く、よく見えない。明かりを持ってこなかった事が恨めしい。

「イチヨウ」

瞬間。

鼓動が止まる。

脱ごうとしていた手が止まる。

「湯に浸かりに来たように見えるが、我が入るところじゃ。入るのなら我の後にしてもらえぬか」

「え、と、そ、あの、あ」

早く弁明を。

これは事故であって間違えてもわざとではない、と。……しかし口は馬鹿になっている。いや、頭も平時の時より馬鹿になってしまっ

ている。

「いやっ……その……えーっと」

「なんじゃ？　一緒に入りたいのか？」

「いや、そうじゃ、ないわけでもなくて。…あー、それじゃなくて、やっぱ懷中電灯持って来ればよかった、でもなくて…」

フローズから視線を逸らして、ドキドキと高鳴る心臓を落ち着かせる。

「これは、注意しなかった俺のせいで、こうして出くわした時点で俺には言い訳も出来ない。――けど、見てない。うん。見えてないからっ。いや、ほんの少しは見ちまったけど、それは不可抗力であって」

「？」

できるだけ冷静に喋ったつもりだけど、後半部分が怪しい。

フローズは何やら考え込んだ後。

「イチヨウ、こちらを見よ」

「無理」

いま向いたら確実にやられる。身体ではなく心が。

「どうしてじゃ？お主の好きな女体が見れるのじゃぞ」

「俺は好きだと言った覚えはない」

「オスであるならメスの裸を見てみたいと思うのが普通だと思ったのじゃが」

下を向いたまま、なんとか視界から外そうとするが、つい目が彼女の足下から上に行こうとする。

「——っ。確かにそうだが、女の方から見せようとするのは普通じゃねえ」

「それはつまり、私の身体は見るに値しない、と。——確かに、

そこまで豊潤な肉体ではないからのう」

そう言い、彼女の手が自らの胸元に伸びていく。その滑らかに動く手に思わず、俺の視線もそれに釣られて上にあが——っというか、あぶない。何が危ないかって、彼女の手動きに惑わされて絶対領域である太ももから上に行ってしまうそうになり、つまり、惜しい——じゃなくて危険だった。

「……ふむ。形は悪くないのだが、大きさがちと足りぬか」

——くっ。なんという思わず見てしまいそうな言霊っ。だが、耐えろ俺。どうあってもあれは俺を釣るための撒き餌。食いついてしまえば俺の負けだっ。

そんな変な意地のおかげでなんとか自身を制御して視線を足下に留める。

と、妙に気になる白い物体が暗がりの中見えた。なんだろうと、目を凝らす。

それは、真っ白な毛で覆われ、彼女の身体から垂れ下がるように足下にある。しかし、こうも暗くてはそれがなんなのか判断できない。

「のう、イチヨウ」

別の所にあつた思考が現実へ引き戻される。

……気が緩んでいたのだろう。半ば反射的に彼女の方へ視線を向け――五感が麻痺した。

「お主から見て私の肉体はどう映る？」

……なんだコレは。

目の前のアレはなんだ。

あまりにもふざけている。

目の前には、一糸纏わぬ彼女の姿。月のしずくのようにざわめく髪。病的な白い肌は、月の光の下で魔力を帯びているように見える。

それだけの神秘性を感じるのに、この蠱惑的な肉の盛り付け。

ドクン、と一際大きく跳ねる鼓動。

細胞がざわめいている。

まだ幼さを残しながらも、それを感じさせないほどの生々しい肢体。

優れた感性を持った魚でも食いつかずはいられない程、目の前のモノは狂っている。

「…やはり、子供のようにしか見えんかの」

彼女の顔に少し影が落ちる。

「―――っ」

息を呑むのもためらってしまう顔。その哀しみは、俺の心の中へストンと滑り込む。罪を犯した罪人のような気分だ。

「おれ……俺は、その……」

もう、なりふり構っていられない。これ以上何も喋らないのは彼女への冒瀆であり、俺自身の恥となる。

カラカラになった喉を無視して必死に声を出す。

「――く。はは、はははは」

「……………え？」

暗い表情から突如、笑い出すフローズ。

「くく、ははははは。――いや、すまぬ。お主の反応があまりにも面白すぎてな、つい、我も調子に乗ってしまった」

「え……………はい？」

フローズは弾けるような笑いから息を整えて言葉を続ける。

「だから演技じゃよ。演技。…しかし、イチヨウのあの間抜け面は傑作じゃった。なにしろ我を見ないよう必死だったからな」

思い出すようにフローズは頬をひくつかせる。そんな姿を見た俺は、ただ呆然と眺め、大切な何かが崩れていく音を感じた。

——やられた。

確かに確認もせずに入ってきた俺が悪いのはわかる。彼女がこうして悪戯を企てるのも納得できる。

しかし、これは酷い。

女性に慣れている奴ならいざ知らず、俺みたいなまともに耐性のない男子がこんな事をされたらトラウマになりかねん。いや、俺はトラウマになりかけている。

いつからそんな演技をしていたのかは、この際どうでもいい。いや、むしろ聞きたくない。聞けば立ち直れなくなりそうで怖い。

「どうしたイチヨウ？死んだ魚のような顔をして」

俺が部屋の隅で項垂れているのを見て、半笑いのまま話しかけてくる。

「……これから先、女の事は信用しない事にする」

俺の落ち込みようを見て、ちとやり過ぎたかのう、とバツが悪そうに頬を掻く。彼女の感情には邪気はあっても悪意そのものはなかった。彼女にとっては軽いお遊び程度だったのだろう。

しかし、彼女にその気はなかったにせよ、行為自体に悪意が混ざってしまった。それは純情な男の子にはあまりにも酷で辛い仕打ちである。

「……いや、もう死のうかな、俺」

それによるダメージは瞬間的なものはなかなかではあるが、実際のところ、後のからのダメージの方が辛い。じわじわとこびり付いたモノに精神が浸食されていくのだ。

「……重症じゃな、これは」

溜め息をつきながら、額に手を当てる。

彼女から見ても俺は相当深刻らしい。——当然の事だ。俺が原因ではあるが、その後にした彼女の行為は罪が重い。純情な男の心を弄んだ悲哀を知れ、といやつだ。

「…まったく、仕方のない奴じゃのう」

そう言うのと、彼女は此方に近づいてくる。

反射的に体が強張る。

「イチヨウ。湯に浸かるぞ。その供をせよ」

その言葉に反応して顔を上げそうになるが、ぐっと堪える。

その言葉の意図は掴めないが、これ以上彼女を直視することは出来ない。ささやかな抵抗、ではなく自己防衛のそれに近い。

俺は残った意地を総動員して迎え撃つ。

そんな黙り込む俺を見て、またもやフローズは溜め息をつく。

「…ならば、問答無用で連れて行くだけじゃ」

そう告げると同時に、俺の体に白い毛の生えた長い何かが巻きつく。

「はあ………?」

勢いよく体に巻きついたソレは、優しく、それでいて逃がさないと
いった感じに強く締め上げる。

「——くっ。ちょっと待て、何だよこれっ。っーか放せ!」

「これでの力加減は難しいんじゃない。じっとしている」

こちらの話を全く聞こうとしないフローズは、ずかずかと大浴場へ
入っていく。何かに縛られ、身動きが取れない俺も彼女に引きつら
れていく。

なにすがまま。逃げる事も出来ない俺は、せめての抵抗と思い、彼
女の後姿を睨めつける。

——と。

そこであることに気づいた。

彼女の腰、臀部の辺りから尻尾のようなモノが生えているのが見え

た。

「え—————?」

それは、床にまで伸びて俺の体に巻きついていて。人工的に付けられた風には見えず、よくよく思えば自身に巻きついたコレからは体温のような温もりを感じる。ちゃんと生きているのだ、と身動きするたびに身体を締めてくる。

「—————あ」

証拠は揃っている。この白い毛で覆われたモノは、おそらく彼女の尻尾。

しかし、いや、だからこそ理解できなかった。

なぜ、こんなモノが彼女から生えているのか。その理由がわからない。

「着いたぞ」

短く切られた言葉に反応して奥の光景に目をやる。

ここは大浴場。何十人と一気に入り込んでも余裕がありそうな程の広い空間となっている。

床には大理石、だろうか。それらが所狭しと敷き詰められ、壁には剥き出しの岩や草木が生えている。

そして、中央には大きな円で囲ったような湯船——いや、これを湯船というには語弊がある。プール、という方が正しい。その中央には岩が突き出ており、隙間からお湯が染み出てきてくる仕様で、なんとも娯楽施設のような風呂場だ。

「——先に入っておれ」

浮き上がる体。突如の浮遊感に恐怖を感じる。

「ちよっ——」

こちらの静止はもちろん聞かずに、中空へ投げ出された。

飛ばされた体は放物線を描きながら、当たり前のように水面に叩きつけられる。

……音が遠い。

叩きつけられた衝撃で、キーンと耳鳴りがする。

暗い水の中にいる。少し水を飲んでしまった。

自分が今どういう状態かわからない。

月の光を掴むように、なんとか体制を整え、水中から抜け出す。

「――ぷっ。……はあ、は、…はあ、はあ……は」

大きく呼吸をして、空気のありがたさを味わう。

「……受け身もまともにできんとは」

後からゆっくりと入ってきたフローズは、情けないと言。

「…フローズ、てめえっ！」

反響する怒声。しかし、フローズは別段気にすることなく、丁度いい湯加減を満喫している。こちらを挑発しているとは思えない態度だ。

あー……無理。もう無理、限界。いくらフローズが相手でも、これは我慢の限界だ。

熱いお湯の温度も相まって、頭の中は沸騰寸前。これでは真面目な思考は望めまい。

———気づけば、体は動いていた。

水の抵抗感じさせぬ勢いで彼女へ接近する。

手は勝手に拳になっている。

それを振りかぶり、彼女に目掛けて全力で振りぬく。

———当てるつもりはない。そもそも当たらない。

あの夜の出来事で彼女がこの程度の攻撃を避けない訳がない。

だから、この攻撃は無駄。俺のしている事は無意味に等しい反抗。勝てないと判っているながら、なお挑む愚行。愚者。

——けど、それでも。

今の感情を無視できるほど、俺は人間出来てはいなかった。

振りぬかれる腕。彼女へ迫る拳。

目前まで迫っているというのに彼女からは避けようとする気配は一切ない。

勢いそのままに攻撃。今さら止めることは出来ない拳はあっさりと鼻の先に触れ、

「技巧も何もない、ただの拳。……まったく、お主はなんなだろうな」

予想通り、止まった。

「くっ………」

腕は当たる寸前の所で動かなくなった。

それは、自分の意志で止めたワケではなく、距離が足りなかった、なんて理由ではない。

自身の右腕に視線を落とす。

腕に絡みつくように彼女の尻尾が俺の腕をそれ以上動かさないようにしていた。

———よかった

殴るつもりなんて毛ほどにも思っていなかった。フローズが避ける素振りもしなかった時はゾツとした。

もし、本当に女の子を殴るような事態なんて、想像もしたくない。それこそ、さっき以上のトラウマものだ。

「——で。この後はどうする？　まだ、やるかの？」

深く息を吐く。

さっきまでの熱はもう下がっている。

いま行った深呼吸は安堵によるもの。

「やんない。こうもあっさり止められたら、拍子抜けっーか期待通りっーか…」

「ならば、さっき話した通り、ともに湯に浸かれ」

「いや、人の話は——って、ぬおっ」

巻きつかれた腕が強引に引っ張られ、彼女の隣へと誘う。

…やっぱ、殴った方がよかったのかなあ。



さざめく風。憂愁の風。

一緒にお風呂に入ろう。

フローズは、その言葉を力業で実行した。

俺はその力に屈服し、彼女の隣でお水生活以来の苦行をしいられている。

：いや、なんというか、隣には目を疑いたくなるほどの美女がいて、しかも美女は裸体、あまつさえ隠そうとしない。

これは男として見られていないだけなのか、それとも信頼しているという事なのか。

出来れば、後者であって欲しいと、切に願う。

まあ、それでも。どっちだろうと、この状況をじっと耐えねばならない事には変わらない。

ままならない状況ではあるが、間違っても今日が満月だからと狼に変身するような事はない、と思う。

しかし、この精神——いや魂を削る作業は、正直まずい。今はいいが、後の事を考えるとあまり良くない。

なので、別の事で意識をそちらに向けるように努める。

「…なあ。俺、服着たままんだけどさ」

「脱がした方がよかったか？」

「…いや、それはそれで、まずい。けど、服を着たままってるのは、なんか、おかしい」

「別によからう？ 我は気にせん」

「————」

まったく話にならなかった。

我ながらつままない男である。だが、許してほしい。

もう少し、明るい話題や広がりがありそうな話をすればよかったのだが、生憎、そういう話題はネタ切れであった。

そもそも、俺はお喋りとかあんまり得意ではなかったし、割と狭い世界でしか生きていなかったから、ネタが切れる以前に仕入れをしていなかったのだ。

「しかし、お主もやる時はやるのだな」

「? なんだ、急に」

急の話題に内容が見えてこない。

「先ほどの攻撃じゃよ。将棋では徹底した守りだったのに、実践では無謀といえる大胆さ。…ま、褒めることではないが、お主はただやられるだけではないという事がわかったのは、お世辞抜きで嬉しい」

「…いや。そこはフツー怒るところだろ。結果としてみれば、主人に反抗したんだぞ?」

「契約する時に言ったであろう。信頼関係の契約だと。主従という

のは形だけで、縛るような事はしないと。それにお主は私の事を信頼して反抗したのだろう？ならば、その事は気にはしない。寧ろ、お主に信頼されて心地よいくらいじゃ」

「――――」

「イチヨウは我を信用して、自身の感情をぶつけてきた。ぶつかって互いに傷つくことはない。しっかり受け止めてくれる、と」

「……でも、良くないだろ、そういう考えは。あの時の俺はどうかしていると思うし、本当はそんなこと考えていなかったかもしれないだろ？」

「確かに、一方的な押し付けだ。思い上がりも甚だしい。……しかしな。相手を信頼するとはこういうことであろう？我がこうして、喋っている事も単なる勘違いかもしれん。だが、イチヨウがそう考えて行動したのだと、我は信じている」

なにか眩し過ぎる言葉に目を逸らしたくなった。

フローズは俺の事を信用していると言う。

だが、逆に言えば、それは自分の考えや価値を押し付けているだけ

に過ぎない。

自分がこう思うから相手もそうなのだと、勝手に自分の都合の良いように考える行為。自己中心的な考えでしかない。

けれども、そう考えれば俺の取った行動はどうだ。

当たらないという勝手な思い込み。受け止めてくれるという思い上がりの勘違い。

いま彼女の言葉に感じている気持ちと何ら変わりはない。都合の良い考えだ。

彼女はこれを信頼と言う。

詭弁じみて、なんとも胡散臭い。

そこには安心があり、打算があり、不確かな感情がある。ただ単に相手を利用し、利用されているだけで、信頼という綺麗な言葉は似合わない。だからこそ、彼女が嫌う『契約』というモノが出来たのだろう。

「イチヨウも我の事を信頼していたのであろう？」

「――俺は――」

俺の取った行動の原理は確かに彼女のいう、信頼によってなされたものだろう。でも、それはあまりにも現実的ではない。信頼と呼ぶには幻想的すぎる。

「…うん。フローズなら受け止めてくれると思ってた」

でも、その幻想というのも悪い気はしない。眩しいものに目を細めただけじゃないかと思った。

こくこくと、彼女は満足気に頷く。

――だって、そうでなければ世界はただ闇だけになってしまう。

「…それとき。今日は、ありがとう」

ふと、思い出した事を口にする。

「なんじゃ？ 我の肢体を見れた事への感謝か？」

「——ちげえよ。ほら、俺が寝ている間に毛布かけてくれただろ。そのお礼だよ」

できるだけ彼女の顔を見ないように感謝を告げる。

気持ちがこもった感謝とは言えないが、今できる精一杯の言葉。

それを聞いたフローズは、さつきより上機嫌に、うむ、と返事を返してくれた。

「ふう……ん、んんー」

聞いたこともない異国の調べを鼻歌で歌うフローズ。

「……………」

昼間に感じた彼女との距離感は、肩がぶつかるほどの身近な……そう、ほん少しかもしれないが縮まった気がする。

……もちろん、物理的な意味では密着しそうである。

「どうした？ イチヨウ」

「あー………」

頭が上手く働かない。

集めのお湯にずっと浸かって、途中にああいうことで色々考えた頭は、どうにも鈍くなっている。

考えても埒が明かない。

いまこうして横目で見る彼女はとても綺麗で、水で濡れた髪はしつとりと潰れてしまい、そのせいか頭の上には犬のような耳がぴょこんと出ており――

はい――――？

これはなんだろう………と触れてみようとする。

「……あ——」

俺が呟いたのか、フローズが漏らしたのか。

ただ、堪らないほどの肌触りに心地よさを感じて——俺の身体は水切りの如く水面を跳ねた。

驚いたことに、人間もゴミのように飛ぶんだと実感した。

ふん、と熱いお湯に浸かりたせいなのか、彼女は耳まで赤くして浴場から出ていく。

なにがどうなのかさっぱり分からない俺は、ただ、遠のいていく意識の中で、やっぱり反抗したことを怒っていたのかと思い、水中の底へ沈んでいった。

あまりの眩しさに目が醒ますと、時計はもうすぐ昼に差し掛かりそうだった。

頭が重い。身体が軋む。車に跳ねられた気分である。

それにしても、もの凄く肌寒い。季節でいえば、春ではあるが、まだまだ冬の名残が残っている。

目が眩むように眩しい。一夜明けると大浴場での出来事が夢のような気がする。

もそもそと着替えて起きだすと、我が主がノックと共に部屋へ入ってきた。

フローズは、昨夜の事の謝罪と注意をグチを零すように話してきた。

「昨日は悪いことをした。危うく手加減しそこなうところだった。」

だが、お主も反省して欲しい。手加減できたからいいが、出来なかつたら殺しているところじゃ。お主には少し、女というものを学んでもらおうと思う」

フローズは俺を見もせずになんかいった。蔑みのこもった言質で従者を威圧する。

朦朧としていた意識はビシッと定まる。

飄々気軽に相對した自身の心はガツチリと硬直した。

「……イチヨウ。質問はあるか？」

「いいえ、まったくありません、我が君」

手を胸に当て彼女に敬服する。その態度が氣に喰わないと不愉快そうに溜め息を零す我が主。まあ、あれだ。絶対命令権とかない契約ではあるが、本気で命令されたら抗うなんて出来るはずないのだ。

「……まったく。昨夜はあれだけ反抗的だったというのに、今は従順とはな。どうも空氣読めてなさそうで、肝心な所で読んでいるのじゃお主は」

「これで生き延びてるからね。まあ、その辺りはフローズだって分かるだろ」

断っておくが、俺は空気を読めない。彼女の手前わかっている風の話しているが、今現在もまったく読めていない。たまたま、そういった行動を取っているだけで、基本、考えなしである。

「ん？　それで学ぶっていうけど、具体的にどんな？」

「これから外に出てもらう。話はそれからじゃ」

何をやらせるのか話すこともなく、フローズはさっさと部屋を後にする。何が無だかわからない俺は、ただ、彼女の後ろについて行くしかなかった。



「なあ、ちょっと腹が減ったから何か食ってからにしない？」

彼女の背中について行きながら、ふと、空腹を訴えてみる。

時間にしてみれば今は昼時。これから何をやらされるのかは知らないが、その間に食事を取る時間があるとは思えない。朝を抜いてしまった身として昼くらいはちゃんと栄養を補給したい。生きている以上、その辺りしつかりしておかないと体に悪いのだ。

「もうそんな時間か」

足を止め、太陽の位置を確認するようにちらりと空を見る。

「だが、昼は抜きじゃ。下手に満腹になって動けなくなつては困る」

そう告げると、さっさと歩きだした。

「……そうか。でも、普通に食べる分にはいいだろうに——ああ、それと外でやる理由はなんなの？ 室内じゃダメなのか？」

「ダメに決まっている。室内ではやるには少々（・・）狭くてな。館を全壊してしまつてはたまらん」

「……穏やかじゃないなあ。でも、俺に出が来るとすれば窓を破ったり、壁に穴を開けるくらいで全壊は無理——ていうか、マジで何やんの？」

恐ろしい考えが背中を撫でる。勘違いだよね？

「せっかちな男。そんなに聞きたいのか」

当然だ。何も聞かされていない上に不安を掻きたててくれる答えを聞いては黙ってられない。

「お主は頭で理解させるより、体で覚えさせた方が効率が良いと理解したからな、実践で学んでもらうことにしたのじゃ」

「実践って——目的は女の子の扱いを学ぶ事だよな？」

「そうじゃ。それで、この島で女といえば我^{われ}しかおらぬ。故にお主には、まず、我の事を理解してもらおう。——つまり、我の事を知るには戯れるのが手っ取り早いと思ったのじゃ」

「待った。それはやめようフローズ。どう考えてもそんなのやったら、俺、死んじゃう気がする」

彼女のいう事は理解できる。：理解できるんだが、周りに被害ある遊びって何？スゲー怖いんですけど。

拒否の言葉を聞いてフローズは立ち止まり、踵を返す。

「では、私が話ただけで理解できるか？ さっきも言ったが、お主は頭より身体を使ったほうがいい。長い目で見ればそれでいいが、お主には時間はあっても忍耐があるとは思えん。これは、我なりの配慮でもある。それでも不服か？」

む、確かに肉体労働したほうが性に合っていると思う。だが、今回は勘弁してほしい。ここんどこずっと、死にかける事が多すぎて俺の強運とやらもネタ切れだろう。

「その気遣いは嬉しい。けど、もう少し違う方向に向けて欲しい。主に命のやりとりなんて物騒じゃない方向に」

「物騒とはなんじゃ。せつかく我と戯れるというのに。——それともお主は単に我と戯れたくないのか？」

フローズは男なら誰でもノックアウトしてしまう可憐な顔立ちで哀しそうな表情を浮かべる。こんなの見せられたら罪悪感でなんでもいう事を聞いてしまう。だが気をつけろ、こいつは男を熟知している。悔しいが、これは詐欺だ。一目でノックアウトした俺が言うんだから間違いない。

この人型に収まっているのとおかしいと思える彼女は、人を惑わす女優だ。同時に、世界中の男の敵でもある。

「——くっ。確かにおまえと遊べるのはわりと本気で魅力的だ。だが、だからこそ断る！」

生き延びる。小野鎖一葉にとって、これからの人生の命題だ。契約した以上、少なからず危険が伴うのは承知済み。だから、回避できる部分では回避しておきたい。

引っかからんか、と後ろを向き舌打ちが聞こえてくる。表情は後ろからでも感じ取れた。

昨夜、あれだけの事があったんだ。さすがに馬鹿でも学習する。

「…………イチヨウ。どうしても我の誘いを断るんだな？」

「ああ、当然だろ。俺は、わかってて死地に向かうような馬鹿じゃないだ」

だから、今回のホント許してほしい。まだ、蔑まれたり、罵られるだけならいいが、人命に関わるのは勘弁…………あ、あれ？なんだろう、なんか当たり前のように死が近くにある気が——ああ、

これは、あの夜に感じたモノと同じだ。

「…仕方がない。実力行使じゃ」

「フ、フローズ、さん………？」

「……嫌がるであろうと思い、配慮したつもりであつたが。ふむ、まさかここまでして断るとは思わなかった」

「いや、やられっぱなしのもアレだったから、少し頑張ってみました」

もつとも、堪えきれず傾きそうになってしまったが。

「なるほど。サルでも学習能力はあつたな。うむ、そうだな。そうでなくては、興味本位で我の耳に触れようなどする筈がないから
のう」

「…………フローズ？」

「確かにその事を話していなかった我にも責はあるが、それでも女の耳を気安く触るなど言語道断である」

「待った。フローズ、話がおかしくなってないか……?」

「ああ、その不躰な探究心こそ人間に与えられた最たるモノだ。だが、我から言わせれば土足で庭を荒らす蛆虫のようなものじゃ」

聞いちゃいねえし。

隠れていたフローズの尻尾がひょっこり出てくる。

「よい。これから興じるの戯れではなく、駆除だ」

フローズの遊びから害虫駆除にランクアップした事を皮切りに来た道を全力で引き返す。

何も考えていない。頭の中は真っ白。

ただ、恐怖に駆られて無意識に体が動いていた。

しかも、その恐怖の原因は背後からとんでもないスピードでこちらを追いかけてきて、

「おい！やるなら外でやるんじゃないの？屋敷が壊れるのは嫌だっていいながら、自分で壊してちゃ矛盾してんぞ！」

俺を追いかけてくる背後の人物は指先から伸びた爪やら尻尾でこちらを襲ってくる。

「お主が外に逃げないのが悪い。我は、ただ、害虫を追いかけてい
るだけじゃ」

こちらを追い立てるフローズ。容赦のない爪の連撃。

「————くっ」

それを避けようと横に転がる。

「————っ」

走った勢いそのままに転がったおかげでなんとか避けることは出来
ている。が、勢いを殺すことができず壁にぶつかるの必然。

左腕が熱い。

見てみれば服は裂かれ、血が滲んでいる。ただ、幸いなことに傷は浅い。見た目は酷いがそれ程出血はない。

「つ——」

でも、痛すぎる。熱い痛みが全身に伝わる。

だが、痛がつている場合ではない。そうしている内にも彼女は此方に迫っている。

「避けるな。屋敷が傷だらけになってしまう」

「なら、攻撃を止めるよ。そうすれば、これ以上は何も壊れねえって」

「ふん。その減らず口はいつまで言えるかのう」

「そりゃあ、生きてる限り——ぬおっ！」

チリチリと焦げ臭い匂いが鼻につく。

「穴っ、壁に穴が開いてるう!？」

いつの間にか顔のすぐ横の壁には、くり抜かれたような綺麗な丸が開いていた。

「前にも話したが、我は尾の力加減は上手くできん。間違っても当たらぬようにな」

ギューンギューン回転するツイストドリル、じゃなくて尻尾。…おっかない。そんなの当たってたら痛いじゃ済まない。

「っっていうか死ねるっ!」

急いでその場から離れるように走り出す。しかし、まっすぐ走れない。テンパリ過ぎだろうか。足下がおぼつかない。

「どうした? 急がないと追いついてしまうぞ?」

彼女は完全な余裕の下、軽やかな足取り（ステップ）でこちらを追い立ててくる。

「うるさいっ、転がった時に足を挫いただけだ！」

情けない言い訳でしかない。でも、弱音など言えるはずもなく意地になって虚勢を言う。

「あぁっ、ホント馬鹿だ！」

誰に言うまでもなく自身に投げかける。

行く宛もなく、無様に逃げ続ける。どこか隠れる場所でもあればいいのだが、それでも時間稼ぎにしかない。

しかし、こうして走り続けるのにも限界がある。いや、もう限界だ。

「せめて籠れる場所でもあれば……」

屋敷にある部屋はどこも簡素な造りの扉ばかり。しかも鍵も付いていないのでは、簡単に破られてしまう。

「——そうだ。俺の部屋だ」

俺の部屋にはフローズには内緒で鍵が取り付けてある。まあ、だからといって他の部屋よりはいくらかマシ程度だが、今はそれに縋るしかない。

最後の気力振り絞り、走るペースを上げる。

「ほれ。避けねば当たるぞ？」

迫りくる爪。

あと少し……。

飛び込むように部屋のドアに手をかけ中に逃げ込む。ドアを閉めると、騒がしかった廊下が静まり返った。カチツと小さい金属音が鳴り響いた。

静寂が空間を包み込む。夜のような静けさではない。いつ切れるかわからないツタを渡っているような張りつめた空気。

どれだけ動けなったのだろう。仮に現実では一瞬だったとして精神ではその何倍もの時間の流れを感じた。引き伸ばされた感覚。俗に

いう走馬灯というヤツだ。

と、体が酸素を欲しているのに気づく。

「っ、ハアハア…ハ、ハアハア…ハア」

悶えるような呼吸。どうやら長い間呼吸を忘れていたらしい。

壁に凭れながら腰を下ろす。冷たく湿った服が密着して心地よく感じる。けれど、安堵感を感じない。身体は未だ熱を持ち、いつ来るかわからない襲撃に備えている。

落ち着きだす呼吸。少しずつ明瞭になる現状。

こうして落ち着けたのはいいが、ハッキリ言って後がない。窓から逃げ出そうにも今になって足が震えて動かない。絶望的だ。

逃げ込んだつもりが、死に場所を選んだだけになってしまった。

「……あゝ、馬鹿だなあ、俺って」

あの時、黙って彼女の誘いを受けていればこんな事にはならなかった、かもしれないのに。

「…いや、結果的にはこうなる運命だな」

そもそも、こんな遊びに女の子を知るための要素なんて一握りも存在しねえ。

単にフローズが暇でこんな事を仕出かしてるだけではないのか思える。

「……それにしても静かだな」

この部屋に逃げ込んでから、それなりに時間が経つ。しかし、扉はピクリとも動く気配はなく、壁に耳を当て廊下の気配を探っても物音一つしない。今さら物が壊す事に躊躇する筈ない。

一向に何のアクションがない。

固唾を呑む。

追われていた時とはまた別の恐怖が湧き上がる。

…どうしよう。廊下そとの様子を見た方がいいのか。いや、もしかしたら待ち構えてるのかもしれない。……だが、

「開けずにはいられない性分なんだよな…」

そっと扉へ近づく。

ドアノブに触れる手は汗で濡れている。

一つ深呼吸。

落ち着いた所で鍵を開け、ゆっくりとドアノブを回して廊下の様子を――

「イチヨウ。開けるのはいいが、そちらには誰も居ないぞ？」

「――――」

…幻覚のような声が背後から聞こえる。

首元にはいつの間にか尻尾が絡みついていた。

ゆっくりと後ろを見る。窓際のカーテンが風で靡いている。侵入経路は窓のようだ。

「しかし、驚いたぞ。外に逃げたとばかり思っていたが、まさかずっと部屋の中に居たとは知らず、島中を探し回ってしまった。やはりお主は生き延びる事においてはなかなかのモノじゃ」

「…はは。お褒めいただき至極恐縮です」

本当は足が震えて動けなかった、なんて言えない。

「……じゃあ、捕まった事だし、今日はお開きという事で……」

「何を言っておるのじゃ？シメはこれからだ」

「くっ……」

首に絡みついた尾が徐々に圧迫してくる。

さて、この場合、彼女の言う締めとはどちらを意味するのだろうか。

最後の意味でのシメなのか、首をシメる意味での事だろうか。

——ああ、意味は両方を指すか。…などと。考えている場合ではない。

「——はな、せ……」

なんとか引き剥がそうと試みるが、そんな素直に出来るはずもなく、この状況から脱せない

わかり切っていた事だ。彼女が本気を出せば、いや、半分の実力でも十分に俺を圧倒できる。

無我夢中で体中を動かす。無駄だと分かっているが体は勝手に抵抗する。

と、ある物が目に付いた。

床に転がったソレを拾おうと手を伸ばす。

ハッキリ言ってソレはこの場を打開できる物には思えない。しかし、それでも手を伸ばす。

「安心せよ。殺しはしない。ただ、女の誘いを断るという重大さを知ってもらうための罰じゃと思え」

なんとか手に取る。

「――ハッ、束縛…しない、って、言いながら…なんだよ……それ」

「勘違いするな。コレは女の事を知るための第一歩。契約とはまた別の話じゃ」

「っ。わかった、よ。…じゃあ、とりあえず、こっちも…男って生き物を……教えてやる!」

彼女にソレを向ける。

「くられ、文明の利器ッ――!!」

手に持った懐中電灯のスイッチを入れると、ささやかだが希望の光が溢れる。

「つ——」

フローズは突如の光に驚き、目を瞑ってしまう。一瞬だけだが、首に巻きついた尾が緩まる。だが、それ十分。渾身の力を込めて尾を引き剥がし、もつれる足に活を入れ、そのまま窓へ走る。

耳内の蝸牛をかき乱すような自身の鼓動に体がグラつく。

「……、——！！」

フローズを通り過ぎる最中、走りが倒れこみに変わる。

視界が暗転する。

よくよく考えてみれば当然だった。首を絞められ、まともに呼吸ができなかった状態からの全力疾走。鍛えもしてない自分の体には負担が重すぎた。まあ、それだけなら倒れこむほどの事ではないのだが、その前にも限界まで身体を酷使していたのも要因になったのだろう。

だが、このまま無様に倒れこむワケにはいかない。

なんとか腕に力を入れ、体から倒れこむのを防ごうとする。――

「イチヨウ」

霞む視界の前に彼女が写った。

しかし、今の俺にはどうすることも出来ず、彼女を押し倒す形で倒れこんだ。支えることも押し留めることも出来ず。

「イチヨウ。大丈夫か？」

彼女は俺を胸に抱いたまま、こちらを気遣う。

焦点の合わない目で彼女の顔を伺う。

「……あー、すまん。押し倒してしまって」

おぼろげに謝罪する。

「ふん。お主は少々体力が足りないようだな。私の従者ではそれではいかんぞ」

「……確かに……これは、まずい、な……」

虚勢を張りたいところであつたが、状況的に説得力が皆無の為、素直に返事をしておく。

ふむ、と手を顎に当てながらフローズは考え事に没頭する。

何を考えているのだろうと思つたが、それよりも目の前にある感触に思わず心地よさを感じてしまい、意識が遠くなる。

柔らかく、弾力のある、服越しでもわかる女性の感触。鼻孔をくすぐるような甘い香り。

それは、高級なマットレスや羽毛布団なんてものとは比べモノにならない。むしろ、そういう比べるという行為自体、罪だと思えるほどに。

「イチヨウ。明日から毎日、これ続けるぞ」

「————え？」

思ってもみない発言に、埋没していた意識が起こされる。

「戦えとは言わん。だが、いざという時に無理が出来るくらいの体力はつけておけ。どうせ、おぬしは逃げるのが専門なのじゃから」

「…体力をつけるのには同意できるが、今日みたいなのを毎日？」

正直、こんなのやっていたら体力がつく前に死んでしまいそうだ。

「そのあたりは手加減してやろう。お主は暇であろう。なに、気にするな。あれから訪問者が来ない故に我も暇であったからのう」

「————」

「…まったく。我が目覚めてから一度しか訪問者が来ないとは、この時代の人は何を考えているのじゃ。退屈で仕方がないではないか」

どんどん話が進むのはいいが、これは明らかにフローズの暇つぶしでしかない。

「――なあ、一応聞くが拒否した場合は？」

「もちろん、今日のような調教メニユとなるが、お主がそれで良いのなら
我は構わんぞ？」

「……了解、マイマスター……」

「うむ。――では、今日はそれなりに頑張ったから褒美じゃ。我の胸を味わって眠るがよい」

—

言われなくても、そうするつもりだ。だって、もう限界だし。

・
教訓。

一。フローズの誘いは如何なる場合でも誠意を持ってうけるべし。

二。事場合によっては拒否して、過程はキツイが偶には彼女の胸の中で眠るのも良いと思うべし。

なんて。

ぼんやりと落ちていく意識の中、彼女の恐ろしさと優しさを実感したのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0951y/>

Mr.big

2011年12月3日20時56分発行